大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.72　2018. 8. 1.

目次

仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進 1
2018(平成30)年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧 2
2018(平成30)年度「指定研究」等研究目的紹介 5
2018(平成30)年度「一般研究」研究組織一覧 10
2018(平成30)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介 14
海外学会参加・研究調査報告 21
国内研究調査報告 32
公開講演会・公開研究会 37
彙報 42

仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進

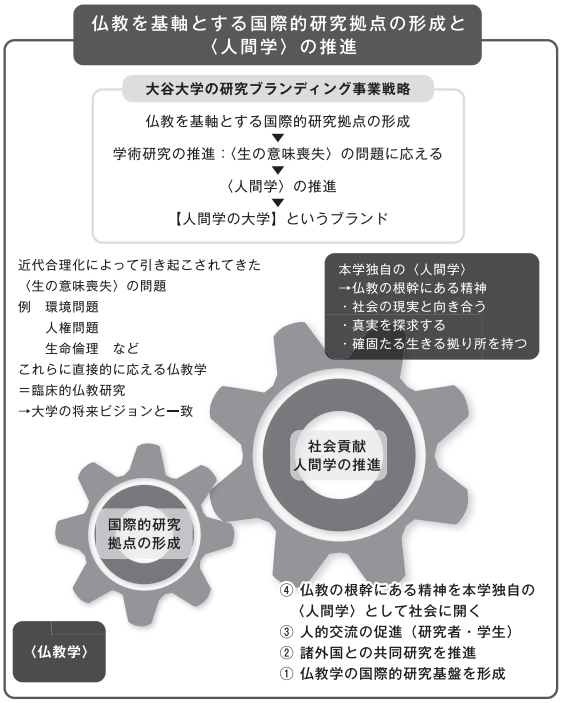
研究ブランディング事業ワーキングチーム／ベトナム仏教研究 研究員・准教授　箕浦 暁雄

大谷大学は、文部科学省平成29年度「私立大学研究ブランディング事業（タイプB／世界展開型）」に選定されたことをうけて、「仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進」と称する事業に取り組んでいる。

この研究ブランディング事業申請にあたってワーキングチームが組織された。他のメンバーと共に、いかに事業計画を立て、どう表現すべきか苦心したが、これからは学内外の協力を得て、どのようにそれを実行していくかが問われることとなる。そのためにも、申請時に作成した事業計画を、新たな気持で紹介しておきたい。

マックス・ウェーバー（1864-1920）は、近代の合理化が〈生の意味喪失〉を引き起こすという重大な問題を提起した。その後、とりわけ二つの世界大戦を経て、近現代という時代を批判的に問い返そうとする試みが様々な仕方でなされてきた。しかし現実には、現代産業社会において世俗化はますます進行し、グローバル化した市場経済の坩堝のなかに投げ出された人類にとって、環境、人権、生命倫理などにおける〈生の意味喪失〉の問題は一層深刻なものとなっている。加えて、市場原理が大学などのアカデミックな領域にまで浸透している。その影響で、社会に対して実質的な貢献をなし得ると見なされる応用科学などの実学が偏重され、人文科学であれ自然科学であれ基礎学の重要性を叫んでもその声はほとんど聞こえなくなってしまっている。

文部科学省　平成29年度私立大学研究ブランディング事業



〈生の意味喪失〉という根源的な問題に直面し、その克服が急務である状況にあって、人文科学とりわけ仏教学のような学問は、その問題に対して直接的に応え得る大きな可能性を有していると考えている。そこで、本学は、次の４つを事業の柱として設定することにした。第１に、本学がこれまで取り組んできた仏教研究の蓄積をもとに、国際的研究基盤を形成する。第２に、アメリカやヨーロッパやアジアとのあいだで共同研究を推進する。第３に、人的交流を促進する。第４に、人類の知的遺産である仏教を社会に対して本学独自の〈人間学〉として開いていく。言い換えるなら、仏教の根幹にある〈社会の現実と向き合い、真実を探求し、確固たる生きる拠り所を持って歩む〉という精神に根ざす人文科学を、本学独自の〈人間学〉として社会に開いていく。

学問とは何か。大学とは何か。昨今の大学が置かれている困難な状況のなかで、古くからあるこの問いに対してどのように答えていくべきか。本学は、伝統的な古典文献学に基づく仏教思想研究を柱としながらも、社会学領域や教育学領域などにも貢献することのできる臨床的仏教研究、社会の要請に応えることのできる研究を推進する。そして、この事業を通して、現代社会のなかで人間の確固たる生き方を探求する独立者の育成を使命とする〈人間学〉の大学であるというブランド・イメージを確立することを目指している。

2018（平成30）年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研　究　名	研究課題及び研究組織	
新しい時代における寺院のあり方研究	研究課題	現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究
	研究代表者	木　越　　康（学長・教授・真宗学）
	研　究　員	東　舘　紹　見（教授・日本仏教史）
		山　下　憲　昭（教授・社会福祉学）
		徳　田　　剛（准教授・地域社会学）
		藤　枝　　真（准教授・宗教学・哲学）
		藤　元　雅　文（講師・真宗学）
	嘱託研究員	本　林　靖　久（本学非常勤講師）
	研究補助員（RA）	松　岡　淳　爾（博士後期課程第２学年）

【指定研究】

研　究　名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	Robert F. Rhodes
	研　究　員	Robert F. Rhodes（教授・仏教学）
		加　来　雄　之（教授・真宗学）
		Dash Shobha Rani（准教授・仏教学）
		田　中　潤　一（准教授・教育哲学）
		新　田　智　通（准教授・仏教学）
		Michael J. Conway（講師・真宗学）
		松　川　　節（教授・東洋史学）
		井　黒　　忍（准教授・東洋史学）
	嘱託研究員	Michael Pye（マールブルク大学名誉教授）
		James C. Dobbins（オバーリン大学教授）
		Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
		Paul Watt（早稲田大学エクステンションセンター非常勤講師）
		下　田　正　弘（東京大学教授）
		羽　田　信　生（毎田周一センター所長）
		阿　満　道　尋（モンタナ大学准教授）
		Wayne S, Yokoyama（元花園大学講師）
		John LoBreglio（EB 誌編集者、オックスフォード・ブルックス大学准教授）
		三　鬼　丈　知（本学非常勤講師）
		井　上　尚　実（教授・真宗学）
	研究補助員（RA）	常　塚　勇　哲（博士後期課程第２学年）
		鶴　留　正　智（博士後期課程第１学年）

西蔵文献研究	研 究 課 題	チベット語文献のデータベース化
	研究代表者	三　宅　伸一郎
	研　究　員	三　宅　伸一郎（教授・チベット学）
		上　野　牧　生（短期大学部講師・仏教学）
		松　川　　節（教授・モンゴル学）
	嘱託研究員	白　館　戒　雲（本学名誉教授）
		伴　　真一朗（2017年度西蔵文献研究嘱託研究員）
		S.DEMBEREL（モンゴル国立大学総合科学部講師）
		山　口　欧　志（奈良文化財研究所研究員）
		渡　邊　温　子（本学非常勤講師・特別研究員）
		Gengga（青海民族大学蔵学院教授）
	研究補助員(RA)	ARILDII　BURMAA（博士後期課程第3学年）
		GENGZANG　QIEZHU（博士後期課程第3学年）
ベトナム仏教研究	研 究 課 題	ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究
	研究代表者	織　田　顕　祐
	研　究　員	織　田　顕　祐（教授・仏教学）
		浅　見　直一郎（教授・東洋史学）
		釆　睪　　晃（准教授・仏教学）
		箕　浦　暁　雄（准教授・仏教学）
	嘱託研究員	桃　木　至　朗（大阪大学教授）
		大　西　和　彦（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）
		Pham Thi Thu Giang（ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授）
		宮　嶋　純　子（関西大学東西学術研究所非常勤研究員）
	研究補助員(RA)	NGUYEN TUONG GIANG（博士後期課程第1学年）
清沢満之研究	研 究 課 題	『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究
	研究代表者	西　本　祐　攝
	研　究　員	西　本　祐　攝（短期大学部講師・真宗学）
		一　楽　　真（教授・真宗学）
		加　来　雄　之（教授・真宗学）
		藤　原　正　寿（准教授・真宗学）
		福　島　栄　寿（教授・歴史学）
		大　艸　　啓（講師・歴史学）
	嘱託研究員	名　畑　直日児（真宗大谷派教学研究所所員）
		川　口　　淳（任期制助教）
	研究補助員(RA)	藤　井　了　興（博士後期課程第1学年）
東京分室指定研究	研 究 課 題	宗教的言語の受容／形成についての総合的研究―哲学的・宗教学的・人類学的視点から―
	研究代表者	池　上　哲　司
	研　究　員	池　上　哲　司（本学名誉教授）
		松　澤　裕　樹（PD研究員・西洋哲学）
		藤　原　　智（PD研究員・真宗学）
		稲　葉　維　摩（PD研究員・仏教学）

【資料室】

名　　称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題	大学史関係資料の収集・整理
	室　　長	阿　部　利　洋（研究所主事・教授・社会学）
	嘱託研究員	松　岡　智　美（2017年度大谷大学史資料室嘱託研究員）
	研究補助員(RA)	老　泉　　量（博士後期課程第３学年）
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室　　長	阿　部　利　洋（研究所主事・教授・社会学）
	嘱託研究員	川　端　泰　幸（講師・日本中世史）
		清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
		舟　橋　智　哉（2017年度デジタル・アーカイブ資料室嘱託研究員）
		山　本　春　奈（2017年度デジタル・アーカイブ資料室嘱託研究員）

2018（平成30）年度「指定研究」等研究目的紹介

新しい時代における寺院のあり方研究

現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究

研究代表者・学長　木越 康
（真宗学）

昨年度（３か年でのプロジェクトのうち初年度）は、①学外講師による研究会開催、②研究所紀要への論文（共著）執筆（研究課題と分析視角、対象の提示）、③諸調査（⑴主たる調査対象地域である岐阜県揖斐川町春日地区における地域・寺院への現地踏査・聞き取り、⑵その他の地域での他機関との共同調査等への参加など）等を実施した。

いずれにおいても、現今のわが国における、都市部への人口集中にともなう過疎化、また、少子化、高齢化等が急速に進行する状況下にあって、それらが地域社会にもたらしている深刻な事態と、その只中で、現状を正面から受け止め、種々のコミュニティや繋がりの維持・展開を期して続けられている、各地域や寺院の地道で真摯な諸活動の様相を目のあたりにすることができた。

２年目である今年度も、昨年度までの成果を踏まえ活動を継続したい。当面、具体的に想定している活動は以下の通りである。

①学外講師による研究会の開催、及び、他の諸機関と連携した調査等諸活動の実施：昨年度に引き続き実施し、研究視角の明確化、及び、問題関心を共有する学内外の方々との連携の強化に努めたい。

②調査活動の実施：主たる調査対象地域である揖斐川町春日地区への聞き取り及び統計的な調査を継続して行う。殊に本年度は、昨年度までの調査において、地域と寺院の関係を再考する上で重要な要素であることが明らかになった、他出子（離郷門徒）の動向、及びそれらの方々と地域・寺院との繋がりについて、必要と判断される調査を重点的に実施し、問題点・課題の明確化に努めたい。

③その他の活動：⑴本年９月に本学を会場として開催される、日本宗教学会第77回学術大会において、本研究に関するパネル発表を実施し、学内外への問題意識・課題の発信と、本研究班における視点の深化に資したい。⑵上述の諸調査以外にも、実施が適当と判断される調査を適宜行い、問題点・課題の把握に努めたい。

本年度も、容易な解決策などどこにも存在しない、現今の日本社会における最も根深い問題の一つが顕現している本研究班の研究対象に、真摯に向き合い続ける姿勢に常に立ち返りつつ、研究を進めていく所存である。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　Robert F. Rhodes
（仏教学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。今年度は英米班、東アジア班の二班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

〈研究テーマ〉

①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。

②東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。

〈活動内容〉

《英米班》

①国際学会への参加

１）ヨーロッパ宗教学会（EASR）第16回学術大会（2018年６月17日～ ６月21日，スイスのベルン大学）
ロバート・ローズ研究員、マイケル・パイ嘱託研究員（マールブルク大学名誉教授）が「Multiple Religious Identities in Japan」と題するパネルで発表を行う。

２）エトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）と共催の第３回国際仏教シンポジウム（2018年９月17日～18日，ハンガリーのエトヴェシ・ロラーンド大学）

以下の通りで本学教員の６名が研究発表および講演を行う。

木越康教授（真宗学）「Recent Trends Concerning the Issue of 'Buddhism and Practice' in Contemporary Japan」(日本における「仏教と実践」という課題についての近年の動向)（基調講演）

ロバート・ローズ研究員（仏教学）「Can Arhats Attain Buddhahood? An Issue in the Interpretation of the Lotus Sūtra」（阿羅漢は成仏できるのか―『法華経』解釈の一つの問題について）

井上尚実嘱託研究員（真宗学）「Problems in "Transfer of Merit" as Buddhist Practice」（仏教の行としての「回向」の諸問題）

藤元雅文講師（真宗学）「Shinran's "Practice": The Shin Buddhist Shift in the Buddhist Understanding of Practice」（親鸞における「行」―「行」理解における真宗（他力）的転回―）

上野牧生講師（仏教学）「On the Listening to Buddha's Words with Reverence: The Very First Step of Buddhist Practice in Vasubandhu's Vyākhyāyukti」（敬意をもって仏の言葉を聞くことについて―世親の『釈軌論』における仏教修行の第一歩―）

マイケル・コンウェイ研究員（真宗学）「Practice and Other Power in Daochuo's Pure Land Buddhism」（道綽の浄土教における行と他力）

②真宗関係の翻訳研究

１）『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトが昨年度、立ち上がった。５年間の予定で年２回（３月にバークレー、夏に京都で１回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に２冊の研究書（注釈付き本文英訳＋研究論文集）出版を目標とする。その第４回ワークショップは 2018 年６月 22 日から 24 日に龍谷大学で開催し、第５回は 2019 年３月１日から３日にバークレー市の浄土真宗センターでカリフォルニア大学バークレー校の主催で開催する。

２）教師課程教科書『宗門の歩み』英訳出版

阿満道尋嘱託研究員を中心に進めてきた『宗門の歩み』英訳を真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版するために、英訳の最終確認と編集校正作業に協力する。

③国際シンポジウムの成果出版

１）真宗近代教学アンソロジーCultivating Spirituality 出版記念シンポジウムの成果出版

2015 年６月 26 日㈮ 27 日㈯ の２日間、大谷大学で *Cultivating Spirituality* 出版（SUNY, 2011）を記念して開催されたシンポジウムの成果を、マーク・ブラム教授（嘱託研究員）とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集により欧米の大学出版から出版する予定で編集作業を進める。

２）エトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）と共催の第２回国際仏教シンポジウムの成果出版

2016 年５月 26 日㈭ 27 日㈮の２日間、ハンガリーの ELTE 東アジア研究所の共催により、「仏陀の言葉とその解釈」というテーマで開催した第２回共同シンポジウムの成果を、ELTE のハマル・イムレ教授と井上尚実嘱託研究員の共編で、2018 年９月末までに出版する予定で編集校正作業を進める。

④ The Eastern Buddhist Society 東方仏教徒協会（EBS）の事業

昨年度の移管に伴う体制の整備を続け、英文学術誌 *The Eastern Buddhist* の編集・出版過程の効率化に向けて編集体制の充実を図る。

⑤公開講演会の開催

国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を３回程度開催する。

⑥真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

電子ジャーナル掲載論文を含めた欧文の仏教学・真宗学関係の近刊データを集めて整理し、公開できるように準備する。国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について、移管できるものは図書館で検索閲覧できるようにする。

《東アジア班》

① 中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づき、本年度においても引き続き、双方の研究者が往来し、共同研究を実施することとし、本学から２名を派遣、先方から２名を招聘し、それぞれ公開研究会を開催する。

② 2015 年 12 月に開催した「中国古代史及び敦煌･トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集を出版する。

③ 戦前、戦中期の大谷派の海外布教に関する研究会を開催する。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

大谷大学には多数の貴重なチベット語文献が所蔵されている。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究・仏教学研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

(1) 専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
(2) 重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること

を目的としている。

また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・経典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。以上の目的を達成するために、今年度は以下の研究を行う。

1．チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

2015年度まで宗林寺（富山県城端）より借用していた寺本婉雅関係資料のうち『モンゴル仏教史』は、1835年にイシ・パルデン（Ye shes dpal ldan）によって著されたモンゴル年代記『エルデニィン・エリヘ』のチベット語版であるが、その存在は現在のところ、この宗林寺所蔵のもの以外知られていない。そこで、この貴重な資料を宗林寺より再借用し、研究を進めてきた。本年度は、そのチベット語テキスト及び影印に『エルデニィン・エリヘ』のモンゴル語ローマ字転写テキストをあわせて刊行する。

大谷大学図書館所蔵チベット語文献の研究としては、稀覯書『サンプ寺誌』(no.13981) の画像データ公開に向けた準備作業を行う。また、『プトン仏教史』やツァンニョン・ヘールカ著『ミラレーパ伝』の邦訳研究、ウメー書体チベット語文献の翻字研究を行う。

2. モンゴル国立大学との共同研究

第1期（2013–15年度）における研究活動の成果物として報告書の刊行を行う。「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」の研究テーマのもと、第2期（2016–18年度）学術交流協定にもとづく交流および調査研究活動を実施する。

3. 海外の研究者・研究機関との交流

中国蔵学研究中心との研究交流を推進する。また、随時、海外のチベット学研究者らを招いての公開研究会を開催する。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授　織田 顕祐
（仏教学）

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づき共同研究を推進する。調査・研究協力のみならず研究者育成などベトナム側からの要請に応じて、仏教研究に関する相互学術交流を行う。

本研究は開始当初から以下を視野に入れて進めている。第一に、これまで十分検討されてこなかったベトナム仏教の調査を実施し、とりわけ北部ベトナムにおける仏教受容の一端を明らかにする。第二に、それらの調査を通して得られたベトナム仏教の独自性に照らして、我々もまた日本仏教史や東アジアの仏教の展開を外側から再検証する視点を得る。具体的な今年度の活動は次の通りである。

① ベトナム仏教概説の日本語訳を進める。（そのための研究協議・相互交流を実施）
② 日本仏教概説のベトナム語訳を進める。（そのための研究協議・相互交流を実施）
③ 現地フィールドワーク（主として北部地域の寺院調査、版木調査）
④ ベトナム仏教関係資料の解読研究を実施する。
⑤ ベトナムにおける「日本語研究教育を含む日本研究・東アジア研究・仏教研究」の現況を把握する。（これは翻訳作業の下準備の意味をも含む。）
⑥ ベトナムの仏教（宗教）・歴史・文化に関する文献資料（外国語の先行研究を含む）の収集を行う。

清沢満之研究

『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究

研究代表者・講師　西本 祐攝
（真宗学）

本研究は、大谷大学編『清沢満之全集』（全９巻、岩波書店、2002―3、以下『全集』）別巻の刊行を研究目的とする。

近年、進展を見せる清沢満之研究において『全集』は清沢満之の著述を踏まえる際のテキストとして必ず参照・引用されており、『全集』刊行はその研究推進に大きく寄与している。『全集』編集の中心的役割を担った真宗総合研究所の本研究は、1981年度の研究所開所から十年を経た、1991年度に発足している。1993年度に当時の研究代表者であった安冨信哉教授によって『全集』刊行への本格的な提言がなされて以降、2002年４月の響流館開館に先んじるかたちで、同年２月に響流館内の研究所に実務の場を移すまでの十年間を含め、文献収集と翻刻校正、掲載基準に関する検討が重ねられた。刊行に際しては編集委員11名、実務担当教員27名、研究補助員４名という全学的な体制がとられたが、刊行の実現はそれらのメンバーのみではなく、研究班発足当時からの研究活動に携わってきた研究員、研究補助員と研究補助者（数十名）の尽力によるものであることを銘記しておきたい。

『全集』刊行後、清沢満之研究は新たな展開をみせている。その中で『全集』未収録文献の情報が寄せられてきた。研究所では、2014年度から本研究を再開し、『全集』未収録文献を収集・翻刻し、別巻刊行に向けた活動を行っている。2017年３月末現在、新たに清沢満之著述と認めることができる37点の文献を収集している。それらの文献について掲載基準に基づく精査を行い、32文献（文字数による概算で『全集』２巻分）が掲載基準を満たすことを確認している。詳細は「大谷大学編『清沢満之全集』未収録の新出清沢満之著述群について」（『真宗総合研究所研究紀要』第35号所収）を参照されたい。

本年度は、入稿原稿作成に向けた活動として、構成案の作成、三次校正までを行う。さらに、校訂、注作成等に向けた作業を開始する。並行して全文献の解題の草案を作成し、各巻解説作成に向けた検討を行う。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・教授　阿部 利洋
（社会学）

大谷大学の歴史にかかわる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の対策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるよう取り組んでいる。いまだ十分に整理できていない所蔵資料の分類整理を継続的に進めながら、図書館１階エントランスホールの展示ケースを活用し、年２～３回のスポット展示によって所蔵資料の公開・展示を行う。

また、今年度も引き続き全国大学史資料協議会の研究会（西日本部会）に参加し、他校との意見交換を通じて、本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善へ向けて検討を加える。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・教授　阿部 利洋
（社会学）

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を継続的に行っている。その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌学データベースとして登録する作業を進めており、今年度も作業を継続する。

また、昨年度より次の２点が本資料室の担当業務に加わった。

(1) 本学博物館所蔵のパーリ語貝葉写本の研究とデジタル・データ化
(2) 東本願寺海外布教資料室から引き継がれた資料の整理および当該資料に関する照会対応

東京分室指定研究

宗教的言語の受容／形成についての総合的研究
―哲学的･宗教学的･人類学的視点から―

研究代表者・名誉教授　池上 哲司
（哲学・倫理学）

真宗総合研究所東京分室での最初の共同研究となる本研究は、分室設置のねらい、すなわち東京という激しく流動する思想の場で自らの思索と研究を鍛え直すことを目指して、宗教において語られる言葉が現実に生きるわれわれにとってどのような働きをもたらすかを解明しようとするものである。

以上のごとき課題の下、松澤研究員は名高い神学博士であるマイスター・エックハルト（ca.1260-1328）が、なぜドイツ語説教で異端的言説をなすに至ったのかを究明する。その際、彼のラテン語著作における聖句解釈の方法とドイツ語著作におけるそれとを比較することで、言葉を受容し伝える者としてのエックハルトの思索を跡付ける。今年度はとりわけ彼の説教に焦点を当てて考察する。というのは、彼の属したドミニコ会の正式名称が「説教者兄弟団」であることからも明らかなように、その説教にこそ彼らの考えた霊性が表現されていると思われるからである。

藤原研究員は、浄土仏教の伝統においてその中心にある「南無阿弥陀仏」という仏の名号に取り組む。というのは、この六字の言葉を受容し、讃歎するというかたちで新たな言葉が創出され、その循環として浄土仏教は伝統されてきたからである。本研究では、その言葉の探求を、親鸞（1173−1262）と、その言説を近代に受容した清沢満之（1863−1903）を中心に確かめる。

稲葉研究員は、パーリ語仏典に用いられる用語について、単語の基本的意味を出発点としてその用法や意味内容の理解を目指す。このことを通して、仏教以前の祭式文化からどのように仏教が興ったか、そして仏教の革新的な点はどこかが考察される。

昨年度は、タイでのキリスト教調査に加えて、ギリシャのアトス修道院における東方キリスト教の「労働と祈り」についての実践調査、およびベルギーのオルヴァル修道院におけるカトリックの「労働と祈り」についての実践調査を行った。今年度は、宗教的聖地（沖縄御嶽･熊野･恐山など）の実地調査と宗教体験（座禅･瞑想など）の実践調査を予定している。

2018（平成30）年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2014～2018年度「科研費」採択】 一般研究（柴田班）	研究課題	紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析
	研究代表者	柴　田　みゆき
	研　究　員	柴　田　みゆき（教授・情報処理学）
		三　浦　誉史加（准教授・英文学・英米文化）
	協同研究員	松　浦　　亨（北海道大学病院国際医療部客員臨床教授）
		杉　山　正　治（本学非常勤講師）
		生　田　敦　司（本学非常勤講師）
		清　水　利　明（本学非常勤講師）
		横　澤　大　典（本学非常勤講師）
		平　塚　　聡（本学非常勤講師）
【2015～2019年度「科研費」採択】 一般研究（江森班）	研究課題	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーション能力の測定方法の開発
	研究代表者	江　森　英　世
	研　究　員	江　森　英　世（教授・数学教育学）
	協同研究員	森　本　　明（福島大学人間発達文化学類教授）
		加　藤　慎　一（奈良佐保短期大学講師）
		竹　村　景　生（奈良教育大学附属中学校教諭）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（上田敏班）	研究課題	ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究
	研究代表者	上　田　敏　樹
	研　究　員	上　田　敏　樹（准教授・情報工学）
		福　田　洋　一（教授・仏教学）
		柴　田　みゆき（教授・情報処理学）
		酒　井　恵　光（准教授・計算機科学）
		高　橋　　真（講師・比較認知科学）
	協同研究員	平　澤　泰　文（本学非常勤講師）
		池　田　佳　和（元本学特別任用教授）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（徳田班）	研究課題	人口減少時代の地方都市・中山間地域の多文化化と地域振興に関する社会学的研究
	研究代表者	徳　田　　剛
	研　究　員	徳　田　　剛（准教授・地域社会学）
	協同研究員	梅　村　麦　生（日本学術振興会特別研究員－ＰＤ）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（松川班②）	研究課題	モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究
	研究代表者	松　川　　節
	研　究　員	松　川　　節（教授・モンゴル学）
		三　宅　伸一郎（教授・チベット学）

【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（西村班）	研 究 課 題	地方の社会解体的危機に抗する＜地域生活文化圏＞の形成と展開
	研究代表者	西　村　雄　郎
	研　究　員	西　村　雄　郎（教授・地域社会学・コミュニティ論）
	協同研究員	岩　崎　信　彦（神戸大学名誉教授）
		鰺　坂　　学（同志社大学名誉教授）
		杉　本　久未子（元大阪人間科学大学教授）
		堤　　圭史郎（福岡県立大学人間社会学部准教授）
		寄　藤　晶　子（福岡女学院大学人文学部准教授）
		加　藤　泰　子（同志社大学非常勤講師）
	研究協力員（支援）	吉　田　愛　梨（首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）	研 究 課 題	変動帯の文化地質学
	研究代表者	鈴　木　寿　志
	研　究　員	鈴　木　寿　志（教授・文化地質学）
		廣　川　智　貴（准教授・ドイツ文学）
	協同研究員	清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
		大　井　修　吾（本学非常勤講師）
		梅　田　真　樹（京都西山短期大学非常勤講師）
	研究協力員（支援）	岡　田　　笙（放送大学教養学部履修生）
【2017～2021年度「科研費」採択】 一般研究（上野班）	研 究 課 題	世親作『釈軌論』の総合的研究
	研究代表者	上　野　牧　生
	研　究　員	上　野　牧　生（短期大学部講師・仏教学）
	協同研究員	堀　内　俊　郎（浙江大学ポストドクトラルフェロー）
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（武田班）	研 究 課 題	５～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較史的研究と３Ｄアーカイブ作成
	研究代表者	武　田　和　哉
	研　究　員	武　田　和　哉（准教授・歴史学・考古学・人文情報学）
		川　端　泰　幸（講師・日本中世史）
	協同研究員	吉　川　真　司（京都大学大学院文学研究科教授）
		横　内　裕　人（京都府立大学文学部教授）
		藤　原　崇　人（関西大学・龍谷大学非常勤講師）
		正　司　哲　朗（奈良大学社会学部准教授）
		古　松　崇　志（本学非常勤講師･京都大学人文科学研究所准教授）
		高　橋　学　而（福岡文化学園博多女子高校教諭）
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（福島班）	研 究 課 題	新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究
	研究代表者	福　島　栄　寿
	研　究　員	福　島　栄　寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
	協同研究員	知　名　定　寛（神戸女子大学文学部教授）
		長　谷　　暢（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
		川　邉　雄　大（二松学舎大学非常勤講師）
	研究協力員（RA）	上　山　　慧（博士後期課程第３学年）

【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（村山班）	研 究 課 題	西洋哲学の初期受容とその展開―井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開―
	研究代表者	村　山　保　史
	研　究　員	村　山　保　史（教授・西洋哲学・日本哲学） Michael J. Conway（講師・真宗学） 味　村　考　祐（任期制助教・西洋哲学） 東　　真　行（任期制助教・真宗学）
	協同研究員	西　尾　浩　二（本学非常勤講師） 狭　間　芳　樹（本学非常勤講師） 三　浦　節　夫（東洋大学ライフデザイン学部教授） 柴　田　隆　行（東洋大学社会学部教授） ライナ・シュルツア（東洋大学情報連携学部准教授） 長谷川　琢　哉（親鸞仏教センター研究員）

【個人研究】

研究名等	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織	
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究（井黒班）	研 究 課 題	前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織
	研究代表者	井　黒　　忍（准教授・東洋史学）
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究（森班）	研 究 課 題	北朝鮮の音楽政策に関する研究
	研究代表者	森　　類　臣（任期制助教・特別研究員）
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究（上田早班）	研 究 課 題	傷痍軍人職業保護事業で整形外科医が果たした役割についての歴史的研究
	研究代表者	上　田　早記子（本学非常勤講師・特別研究員）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（渡邉班）	研 究 課 題	幼児期・児童期前期における自己評価変動モデルの構築
	研究代表者	渡　邉　大　介（講師・発達心理学・教育心理学）
【2016～2019年度「科研費」採択】 一般研究（脇中班）	研 究 課 題	再犯リスク低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価
	研究代表者	脇　中　　洋（教授・発達心理学・法心理学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（阿部班）	研 究 課 題	東南アジアサッカー市場における移民選手の戦略とネットワーク
	研究代表者	阿　部　利　洋（教授・社会学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（福田班）	研 究 課 題	インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築
	研究代表者	福　田　洋　一（教授・仏教学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（池永班）	研 究 課 題	嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究
	研究代表者	池　永　真　義（准教授・美術教育学）
【2017～2021年度「科研費」採択】 一般研究（原田班）	研 究 課 題	ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから
	研究代表者	原　田　奈名子（教授・体育科教育・舞踊学および舞踊教育学・Somatics）

【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（翁班）	研 究 課 題 研究代表者	認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開 ―「主体」論を超えて 翁　　和　美（特別研究員）
【2017～2018年度「科研費」採択】 一般研究（田鍋班）	研 究 課 題 研究代表者	「黒ノート」に依拠したハイデッガーのナチズム問題の再検討 ―メタポリティークを軸に 田　鍋　良　臣（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（塚島班）	研 究 課 題 研究代表者	19世紀フランス詩における宗教的混淆―教育から文学創造へ 塚　島　真　実（任期制助教・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（清水班）	研 究 課 題 研究代表者	東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明 清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（渡邊班）	研 究 課 題 研究代表者	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明 渡　邊　温　子（本学非常勤講師・特別研究員）
【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（岡部班）	研 究 課 題 研究代表者	生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の 実態及び有効性の検討 岡　部　　茜（任期制講師）
【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（岸野班）	研 究 課 題 研究代表者	空海の遺志に立ち返る碩学たち：近世後期の「根本説一切有部律」 研究 岸　野　亮　示（任期制助教・特別研究員）
【本研究】 一般研究（中野班）	研 究 課 題 研究代表者	ソーシャルアクションの国際比較研究 中　野　加奈子（准教授・社会福祉学）
【予備研究】 一般研究（山本班）	研 究 課 題 研究代表者	ユネスコ「世界の記憶」ヨーロッパ最古の公共図書館の成立： 利用者の観点から 山　本　貴　子（教授・図書館情報学）

2018（平成30）年度「一般研究」（新規採択課題）研究目的紹介

共同研究

健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーション能力の測定方法の開発

研究代表者・教授　江森 英世
（数学教育学）

数学学習におけるコミュニケーションは、問題解決、推論、情報伝達、ならびに、数学的知識を関連づけるという数学学習の場で展開されている諸活動を統合する活動である。コミュニケーションは、単なる情報伝達ではなく、情報伝達に付随する認知過程を考慮することにより、個々の学習者の数学学習そのものに深く関わり合うことになる。そしてまた、数学の学習場面で展開されるコミュニケーションは、一人ひとりの学習者に、達成感や充実感をもたらす情意的な過程でもある。私たちは、数学学習におけるコミュニケーションの特性を探究する中で、発話という音、あるいは書いた物や動作など、いわゆる「メッセージ（物理的刺激物）」が人々の間で交換されることによって、新しい数学的アイデアが生み出される様子を「数学学習におけるコミュニケーション連鎖の研究」として考察してきた。しかし、1989年に、全米数学教師協議会が21世紀型の新たな数学教育の目標として提起し、その後、全世界的に広まった「数学的コミュニケーション能力の育成」という目標は、25年余りが経過した今でも、数学的コミュニケーション能力の測定方法が確立されていないために、様々な実践が積み重ねられながらも、そうした学校教育の成果を十分に評価することができない状況にある。私たちは、簡易的にでも、数学的コミュニケーション能力を測定する指標を獲得することによって、学校数学の現場で地道に行われている数学的コミュニケーション能力の育成という教育活動が、正しい方向を向いているのか、あるいは、その努力に見合う成果を達成しているのかを知ることができる。その意味で、数学的コミュニケーション能力の測定方法の開発は喫緊の課題であると言える。現在の数学教育には、知識の協働構成という考え方の教育的意義を高く評価する風潮がある。本研究は、様々な教育学的考察が繰り広げられている協働学習等に関する研究に、その基礎的方法論を与えることになる。

共同研究

地方の社会解体的危機に抗する＜地域生活文化圏＞の形成と展開

研究代表者・教授　西村 雄郎
（地域社会学・コミュニティ論）

本研究の目的は、地方の社会解体的危機が進む中で、地域固有の生活原理として示される＜地域イデア＞を基底におき、地域住民が自律的、内発的に形成しているサスティナブルな＜地域生活文化圏＞の特質を解明し、これを通して「新たな日本社会のあり方」を構想することにある。

このため本研究では「地方の社会解体的危機に抗する＜地域生活文化圏＞形成の可能性」研究（2014～2016年度科学研究費基盤研究（B））から調査対象地域としてきた、①十勝・帯広地域生活文化圏、②大崎地域生活文化圏、③綾部地域生活文化圏、④日田地域生活文化圏を調査対象地域として、

第一に各圏域の歴史的形成過程及びそこに現れた＜地域生活文化圏＞の特質を、「地域自治」、「地域産業」、「地域文化」の三局面に着目し、各圏域固有の自然条件のなかで、これらが連関していかなる＜地域イデア＞が形成され、いかなる＜地域生活文化圏＞が形成されてきたかを明らかにする、

第二に、この＜地域イデア＞を基層として、その上に形成された＜地域生活文化圏＞の現状分析を行う。ここでは、外部社会との係わりの中で、「住民」、「地域自治体」、「企業・協業体・協同組合」、「地域協働活動体」の4セクターが協働して、「地域課題」の解決を図り、新たな＜地域イデア＞を生成させるとともに、そこに現れた各＜地域生活文化圏＞の特質を明らかにする、

このうえで、第三に、各＜地域生活文化圏＞の特質に比較社会学的考察を加えることによって「新たな日本社会のあり方」を構想する、

という三つの研究課題を設定し、岩崎信彦神戸大学名誉教授、鰺坂学同志社大学名誉教授など15名の研究分担者、研究協力者とともに調査研究を行っている。

共同研究

5～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較史的研究と3Dアーカイブ作成

研究代表者・准教授　武田 和哉
（人文情報学）

本研究は、日本や中国などを含むユーラシア東方の世界において、主として5～13世紀の時期を中心として各地に造営された都城と、仏教のシンボル的モニュメントである仏塔に焦点を当て、双方の果たした役割や位置関係、モニュメントとしての特質などの分析を通じて、その背景にある当該時期の政治・経済および社会における仏教の在り方と、その歴史的変遷について、歴史学・考古学・仏教学などの各分野の立場から多角的視点での比較研究を行うことを目的としている。

その研究過程では、都城遺跡に関しては形質や規模、街区の様相等を把握・分析する作業を予定しているが、その際には衛星画像やGIS技術などを用いることとしたい。また現存する仏塔については、最近着目されつつある写真画像を用いた3Dデータ化技術を駆使してモデル化を行う予定にしている。なお、こうした作業を遂行する際にはいくつかの克服すべき課題点が発生するものと予測されるが、それらの解決を通じて各種の作業用のマニュアルを作成し、今後の類似する対象の撮影作業の際に参考となるように各種ノウハウ等を共有する。

以上のような経過により作成した3Dデータについては、今後の仏塔の比較研究のための基礎的データとして蓄積するとともに、一般への公開等を行う予定である。また、ノウハウ等の経験知識についても、同様に成果物として取りまとめてゆきたい。そして、これらの調査研究活動を通じて、各時代の背景にある仏教と政治・社会等の関係や、その歴史的変遷などに関する新たな研究視点の提示を行うことを目指す。最終的には、仏塔という歴史的宗教的モニュメントの総合的研究につなげられるような基礎的研究を実施できればと考えている。

共同研究

新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究

研究代表者・教授　福島 栄寿
（近代日本仏教史・近代日本思想史）

本研究の目的は、従来の仏教史のみならず日本史・琉球史研究で、特に不充分な研究状況にある沖縄仏教史研究、なかでも真宗の布教活動や展開の実態に関して、近世から現代までを視野に入れて総合的な研究を行うことである。

13世紀には中国から琉球に伝来した仏教の真言宗・臨済宗は、近世には琉球王国の王家が受容したが民衆に浸透することはなかった。他方、真宗は、琉球では近世初めに征服した薩摩藩の影響で禁教であったが、遊女などには密かに浸透し、明治初年には真宗信者たちへの法難事件も発生した。その布教方法としては、仏教の専門用語を琉球語に訳して使用し、辻遊郭という場所で秘密裏になされていたが、実態は不明な点が多い。しかし近年、明治初期に浄土真宗の布教を目的に琉球藩に渡った僧侶たちの日記が、彼等の出身地・九州地域の真宗寺院に現存することが判明し、さらなる資料の存在の可能性もあり、調査が必要である。

本研究の課題は、次の3点である。① 明治初期の真宗僧侶の布教日誌や真宗法難事件に関する新出資料の考察、及びさらなる資料調査と研究を通して、沖縄地域における真宗僧侶の布教活動の実態などを解明すること。② これらの布教日誌からは、近世中期から後期にかけて学問所・咸宜園（豊後国）出身の布教僧たちが、長崎へ遊学し、さらに沖縄へ布教するという、豊後、長崎、琉球の三地域を往来する動きも把握可能である。そこで、近世中期から近代にかけて形成された咸宜園を中心とした九州地域と沖縄を結ぶ布教僧たちのネットワークの解明を試みる。③ 近世中期から形成されてきた布教僧たちのネットワークは、近代以降に解禁となる真宗の展開にいかに関わり、現代へと受け継がれ、展開してきたのか。こうした現代沖縄の仏教布教に関する現地調査を実施し、①・②の研究成果を踏まえ、近世から現代までの総合的な沖縄仏教史・真宗史像の解明し、提示すること。以上である。

共同研究

西洋哲学の初期受容とその展開
―井上円了と清沢満之の東大時代 未公開ノートの公開―

研究代表者・教授　村山 保史
（西洋哲学・日本哲学）

井上円了と清沢満之が東京大学においてフェノロサら外国人を中心とする哲学教師から西洋哲学を学び、その後、それぞれ宗教哲学教育を理念とする大学の創設者となったことは知られている。しかし彼らが東京大学で受けた哲学教育の実態は、当時の教師による講義記録や学生による学習記録がごく一部を除き未公開であることから明確にはなっていない。本研究の目的は、井上と清沢の遺稿から発見された東京大学在学時の外国人哲学教師の西洋哲学関係の講義録とそれに関連する学生の学習録の公開作業を通じて日本における西洋哲学の初期受容の一形態を解明し（一次目的）、あわせて、その後の井上と清沢の思想発展過程の一端を解明すること（二次目的）である。

本研究では、一次目的を遂行するための課題（研究課題１ａと研究課題１ｂ）と、二次目的を遂行するための課題（研究課題２）を設定している。

研究課題１ａ：東洋大学が所蔵する井上の哲学ノートは数冊あり、そのうち「稿録」だけが公開されている。清沢より２年早く東京大学に入学した井上のノートには講義録と学習録が混在しているが、本研究ではフェノロサの講義録を含む可能性のある「古代哲学」「最近世哲学史」「英国哲学書」等を翻刻・翻訳する。

研究課題１ｂ：大谷大学真宗総合研究所にはフィルム化・簡易文字データ化された清沢遺稿が置かれ、そこにはフェノロサ以外にもノックスの哲学や倫理学の講義録、ブッセの哲学（古代哲学史）の講義録、授業時に配付されたレジュメ、学習録が含まれている。ノックスの哲学ないし倫理学講義録とブッセの哲学講義録、フェノロサの哲学史講義録（過去二回の科研費研究で翻刻・翻訳した箇所に続く、残りの部分）を翻刻・翻訳する。

研究課題２：東京大学での哲学教育が私立大学の教育にどのように継承されたかを初期の哲学館と真宗大学における教育の確認を通じて明らかにする。

個人研究

傷痍軍人職業保護事業で整形外科医が果たした役割についての歴史的研究

研究代表者・特別研究員　上田 早記子
（社会学）

現行の障害者に対する支援は戦後になり突如として出現したわけではなく、戦前における取り組みが時と共に蓄積、発展し、現在の形となっている。しかし、戦前と戦後との繋がりについて明らかになっているものは少ない。障害者の就労支援を遡ると江戸時代の三弦や三療、明治時代における特殊教育などをあげることができる。そのうち傷痍軍人に対する職業保護は、他とは異なり軍人対策という限界や傷痍軍人のみを対象としているという限界があるものの、現行の就労支援対策との繋がりを考えていく上での歴史的位置付けが大きい。

本研究は、過去と現在を繋げることを目的とし、特に日中戦争時と戦後の繋がりを明らかにすることである。そのため、日中戦争時に設立された傷痍軍人福岡職業補導所を取り上げ、九州帝国大学の整形外科医が関与したことによって、①義肢などの機能を向上させ、②義肢の装着後の訓練を改善し、③作業訓練を開発した結果、傷痍軍人に対する就労支援技術が急速に向上したことを明らかにするものである。その上で、④戦中に開発改善した技術が戦後、新たな分野である作業療法、職業準備訓練と名称をかえて引き継がれていったことを明らかとするものである。

平成29年度は④戦中に開発した技術が戦後、新たな分野である作業療法、職業準備訓練へと引き継がれていったことについて検討した。その中で、戦中に臨時名古屋第二陸軍病院で実施されていた職業準備教育や後療法、精神指導などの違いやその項目が「患者の診察処置に対する具体的方策」との資料の発見により明らかとなった。そのことにより、戦中より理学療法という言葉が後療法の一つとして位置付けられていたことが明らかとなった。今年度は、職業準備教育や後療法がどのように戦後作業療法や職業準備教育へと引き継がれていったのかを研究する。

個人研究

幼児期・児童期前期における自己評価変動モデルの構築

研究代表者・講師　渡邉 大介
（教育心理学）

自己評価とは、個人が自分に抱く、あるいは他者が自分に対して抱いているとその個人が考える相対的な良さであり、自己能力を認知し他者能力と比較することで変動する。たとえば、「僕は鉄棒が苦手だが、A君は得意だ」といった自己と他者の能力比較を通じて、優越感や劣等感などの自己評価の変動が生じる。このような能力認知に伴う一連の自己評価変動過程は、児童期後期以降にはよく見られるが、それ以前ではどうだろうか。こうした疑問を背景にした筆者の一連の研究から、幼児や低学年児でも自己と他者の能力を比較し、それによって自己評価の変動が生じることが明らかになった。ただし、その自己評価変動過程は、児童期後期以降とは異なる、幼児期や児童期前期特有のものである可能性が示唆された。

そこで本研究では、能力認知に伴う一連の自己評価変動過程に関して、自己評価変動過程を規定する要因を特定し、幼児期や児童期前期特有のモデルを構築することを目的とする。研究期間内に以下の３点を明らかにする。①幼児期や児童期前期の自己評価変動過程を規定する要因を明らかにする。②自己評価の変動の指標として種々の感情に焦点を当て、幼児や低学年児が能力認知をする際に働く心理過程を明らかにする。③上記の研究結果をもとに構築した自己評価変動モデルの適合について、日本と諸外国間の文化差の検討を行う。

幼児や低学年児を対象とした、自己と他者の能力認知を含む社会的比較の研究は少なく、その点において本研究は、社会的比較に関する研究や、能力に関連した自己概念・他者概念の獲得に関する研究に新たな知見をもたらす特色のある研究になっている。また、日本の子どもは自己評価が低いことが度々報告されている。自己評価の低さは種々の否定的状況を引き起こすため、自己評価変動の規定因を明らかにすることで、子どもが自己評価を高く保ち、健全な生活を送る上で必要な支援を提供できると考える。

個人研究

嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究

研究代表者・准教授　池永 真義
（美術科教育学）

「感覚間相互作用」は、共感覚（音や言葉に色を感じたり、味を感じたりする感覚）に関連する、聴覚や触覚、視覚などの感覚における互換性を意味する。この互換性（相互作用）は、古くから美術の領域で想像力を発揮し、新たな表現を生み出す重要な手立てとなってきた。例えば平安期の画家は和歌（音・発音）の世界から画（色・造形）の世界を立ちおこしたし、西洋美術でもカンデンスキーが音楽（聴覚）から抽象絵画を生み出したことはよく知られている。また現代の映像表現でも、音の動きから得られる感覚を表現した作品（「風に色がある」と言った台詞とともに流れるアップルの広告動画等）が多く見られる。

表現教育の実践者は、幼い子どもほど共感覚が優れており、柔軟な表現を生み出すことを経験的に理解している。例えば幼児教育における絵や身体活動、音楽（リトミック）、劇等の表現活動を一体的に行う「複合的表現活動」の実践がある。また小･中の音楽鑑賞でも、曲の解釈を言葉にする前に「図形楽譜」と呼ばれる幾何形態で表現させ、視覚的表現の違いから他者の解釈との違いを理解させる実践等がある。

図画工作科の表現領域においても、視覚だけでなく触覚や身体感覚等、諸感覚の互換性や統合性をいかした実践が見られる。ただ、鑑賞領域では、視覚優位の方法に比重がおかれ、視覚と他の感覚を複合的に働かせる教育法の開発は十分でない。だが、鑑賞と表現の一体的関係を考えた場合、鑑賞領域でもかかる教育法の開発は重要となる。

そこで本研究では、原始的で低位な感覚とされがちな嗅覚に注目した。神経科学等では、嗅覚が複数の感覚（音や色等）と結びつき影響を与える、匂いが他の感覚以上に記憶や思考との繋がりをもつ等の知見がある。そこで、嗅覚刺激が鑑賞における記憶や思考を促進するのではないかという仮説を立て、研究目的を、児童を対象とする嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用をいかした美術鑑賞教育法の開発とした。基礎研究では、嗅覚刺激と視覚との相互作用（記憶・思考の様相）を把握するとともに、児童を対象とする嗅覚刺激による鑑賞能力を把握する。次に応用研究では、学生を対象

とする授業実践および考察（鑑賞教育法の構想と実践）を行う。

参考文献：里見まり子（1997）「足」の授業－表現するからだを育てる，久保健編，からだ育てと運動文化，大修館書店．水谷　光（1975）ダンス指導ハンドブック，大修館書店．原田奈名子（2006）評価の視点から授業を構想する，体育科教育７月号，pp.28-31

個人研究

ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから

研究代表者・教授　原田 奈名子
（体育科教育学）

戦後学校教育における表現運動・ダンス領域では、自由で創造的な表現活動を目指して、指導・支援が行われてきた。そして、現職教員からはこの領域の指導・支援は難しいといわれてきた。その難しさの要因は、テーマや題材、イメージが重視されたことによる「学習内容の不明瞭さ」にある。里見は1990年代にすでに「我が国の身体表現の教育には『表現するからだを育てる』という大切な教育の局面が抜け落ちている」ことを指摘している。本来、表現運動・ダンス領域の学習は、「からだの学び」として具体化されなければならないのではないか。本研究では、このような問題意識から、「表現運動・ダンス領域でどのような『からだ』を育てようとするのか」について、ソマティクスの思想とボディ・ワークの技法をもとに問い直すことを目的とする。

第二次世界大戦後、学校におけるダンス教育は、指導者による既成作品の指導から学習者の自由で創造的な表現活動の支援へと大転換を遂げた（水谷,1975）。だが、現職教員を対象とした調査では、その指導・支援の難しさが繰り返し指摘されてきている。これらの先行研究において共通して考察された難しさの要因として「学習内容が不明瞭であること」が挙げられる。

代表者原田は、この領域の段階的な学習についての論説の中で、「動きを見つける工夫の仕方と、見つけた動きや感じそのものが学習の内容である」ことを主張してきた（原田,2006）。この主張にある「動き」には頭で考えた「動き」もある一方で、からだが自然と見つけた「動き」もある。また、分担者大橋奈希左は、学習指導要領解説やダンス教育の先行研究を取り上げ、テーマや題材からイメージして動くという学習過程の前提があることを指摘してきた。ダンスの学習においては、「からだが動くことが学びの中心にある」という現在進行形の営みこそが重要であろう。本研究では、現在進行形の営みにおける「からだの学び」について検討することが課題となる。

個人研究

生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討

研究代表者・講師　岡部 茜
（社会学・社会福祉学）

2000年代以降、日本の若者支援政策の主眼はひきこもりやニート等の、家族扶養が一定期待できると考えられた若者への支援に置かれ、若者支援研究でも主に就労支援や居場所支援が重要な検討事項となってきた。その一方、若者の離家（家族と離れて暮らすこと）の支援はあまり注目されていない。その背景には、所得が離家と関係するため、就労支援が進めば離家にもつながると考えられたことがあるだろう。しかし、離家が進まず家族と若者が同居し続けることは、家族扶養のもとに若者の困難を潜在化させるだけでなく、若者と家族の間の葛藤を生じさせ、生活や就労をさらに困難にするおそれがある。実際に、若者と家族の間の葛藤の強まりから家庭内暴力に至ることがあり、また無業状態から家族との関係を悪化させホームレス化した若者の事例も報告されている（ビッグイシュー基金2010）。それゆえ、就労支援だけでなく離家支援も個別に検討される必要がある。

若者への離家支援の１つとして、住まいを提供することが考えられる。制度化された支援には、児童福祉法の事業である自立援助ホーム（22歳までを対象）やホームレスシェルター等があるが、現時点では家族が扶養できる若者の利用は困難である。一方、民間で運営されてきた他者と生活する共同生活型の支援施設は年齢による制限がなく柔軟な対応の可能性を秘めている。しかし戸塚ヨットスクール等、入居した若者を死亡させた事件が続き否定的なイメージが付与された。それらの事件は、支援のパターナリズムとして批判されてきたが、そもそも入居施設での支援は閉鎖的になりやすく暴力を生じさせやすい。ゆえに、暴力事件への批判だけでなく、暴力を排する仕組みも含めた共同生活型支援の実践検討が必要である。そこで本研究は、現在の日本で取り組まれている共同生活型の若者支援

の実態を把握し、その有効性を検証することを目的とする。

参考文献：ビッグイシュー基金（2010）『若者ホームレス白書』

個人研究

空海の遺志に立ち返る碩学たち：近世後期の「根本説一切有部律」研究

研究代表者・任期制助教　岸野 亮示
（仏教学）

インドからチベット文化圏と漢字文化圏の双方に伝わった唯一の戒律テキストとして学術的な注目度が高く、また日本においては、空海（774-835）が、ひそかに重視したことで、その後の仏教界に少なからず影響を与えている「根本説一切有部律（こんぽんせついっさいうぶりつ）」（以下「根本有部律」）という仏教正典の包括的な研究の実現に向けて、近代以降に再刊されていない江戸期の日本人学僧が著した「根本有部律」に関する研究書（版本）を、その所在が確認されている寺院・図書館において実見調査し、その書誌情報と概要を初めて世に提示する。更に、その一つである、江戸期の日本人学僧の一人が詳細な注釈を書き込んだ、義浄訳『根本薩婆多部律攝（こんぽんさつばたぶりつしょう）』（以下『律攝』）の版本に焦点をあて、書込みも含めた全文を翻刻するとともに、その書込みを解読・分析することで、近代以前の日本人研究者が「根本有部律」をいかに理解し、伝承していたかを明らかにする。

個人研究

ソーシャルアクションの国際比較研究

研究代表者・准教授　中野 加奈子
（社会福祉学）

近年、貧困問題や社会的孤立など、市民の権利や自己実現を阻害する社会福祉ニーズが拡大する一方で、これらの問題の多様化・拡大に既存の制度が対応しきれていない、という問題点が指摘されている。そこには、ソーシャルワーカーの実践が限界性を持つ制度・政策に規定され、ソーシャルワークの理念・価値を基盤とした独自の裁量が発揮しにくい状況にあることも大きな問題として横たわっている。このような状況の改善のために、ソーシャルアクションへの注目が高まっている。

我が国においては「朝日訴訟」や「共同作業所運動」と言った代表的なソーシャルアクションが知られている。これは、当事者や家族、ソーシャルワーカー、研究者が運動の先頭に立ち、生活問題の社会問題化、新たな制度創出に向けたソーシャルアクションを展開した。これらの取り組みは、個別の課題解決に止まらず、社会の価値観や意識を改善することまでも視野に入れた、社会運動としても認識できる。

一方、海外の実践では、イギリスや香港・台湾において、ソーシャルワーカーがネットワークを組織化し、ソーシャルワークの理論に基づいた実践を可能とするような制度改善要求なども実施されている。 またスペインなどでは、社会保障制度の不足を補うような民間福祉実践が展開される中で、制度化要求なども取り組まれている

本研究では、文献や具体的なソーシャルアクションに取り組むソーシャルワーカーへのインタビュー調査を通して、1）ソーシャルアクションの理論的整理、2）ソーシャルアクションのターゲットとなる問題は何か、理論的および国内実態調査および海外（スペイン、香港、台湾）との比較調査から明確化すること、3）これらを通して、我が国のソーシャルアクションの課題を述べ、今後求められる活動やその方法論の確立を目指す。

個人研究

ユネスコ「世界の記憶」ヨーロッパ最古の公共図書館の成立：利用者の観点から

研究代表者・教授　山本 貴子
（図書館情報学）

ヨーロッパで最古の公共図書館の一つとのことで、2005年に、図書館として世界で最初にユネスコ「世界の記憶」に登録されたのが、マラテスティアーナ図書館（Biblioteca Malatestiana）である。

この図書館は、チェゼーナ（イタリア）にあり、当時の領主、マラテスタ・ノヴェッロ（Malatesta

Novello）によって、1452年に設立された。聖フランチェスコ修道院が、教皇庁に修道院の資料を収納する図書館の設立を願い出たところから建築が計画されたが、その要望にマラテスタ・ノヴェッロが費用を負担することで設立が叶った。設立後は、自治体の財産としてすべての人に開かれた図書館だったといわれる。

当図書館は、「世界の記憶」に登録されてはいるが、調査・研究は世界的にもほとんど行われておらず、また、その研究の大半は、当該図書館が所蔵している古写本についてと、図書館建築及び紋章についてである。

そこで、研究全体としては、図書館利用者の側面から、マラテスティアーナ図書館の活動とその歴史的背景について調査・分析する。その際、図書館の設立者であるマラテスタ・ノヴェッロも取り上げる。

この研究は、平成28年度から開始しており、今回の研究では、同時代にイタリアで設立されたといわれる図書館のうち、マラテスタ･ノヴェッロと関係のあったメディチ家とモンテフェルトロ家の図書館について調査する。これらの図書館を調査することによって、これらの図書館が建てられた理由と機能しなくなった理由とを探り、ひいては、マラテスティアーナ図書館が存続した理由を探る。

海外学会参加・研究調査報告

第３回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway
博士後期課程真宗学専攻第一学年　鶴留 正智
修士課程真宗学専攻第二学年　本多 正弥

真宗総合研究所は、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と龍谷大学世界仏教文化研究センターと三者の学術交流協定を2017年３月に結び、『歎異抄』の注釈史に関して５年間の共同研究プロジェクトを始めた。その協定に基づき、第３回のワークショップが2018年３月２日㈮から４日㈰にカリフォルニア大学バークレー校の主催でバークレー市内の浄土真宗センターで開催された。筆者に加えて、本学から、井上尚実教授（真宗学・国際仏教研究班元研究代表）、和田良世氏（2017年３月に本学大学院修士課程真宗学専攻修了）、そして大谷裕氏（現在、本学大学院修士課程真宗学専攻第一学年）が参加した。

第３回目ということで、ワークショップの内容がほぼ固まり、第２回目に引き続き、翻訳部会が四つ設けられ、共同で翻訳作業が進められた。また、昼過ぎの時間を利用して、研究発表が行われた。昨年度と異なって、ワークショップが開催される前日にプレシンポジウムが、カリフォルニア大学バークレー校のキャンパスで開かれ、真宗の社会的実践についてジェシカ・メイン氏（ブリティッシュコロンビア大学准教授）・ジェシカ・スターリング氏（ルイス・アンド・クラーク大学助教授）、ハンク・グラスマン氏（ハバフォード大学教授）という三名が発表した。

以下に本学の学生参加者の報告を紹介する。

本学大学院修士課程真宗学専攻第二学年の本多正弥氏の参加報告は以下の通りである。

第３回ワークショップ参加報告として、今回の進捗状況と所感を簡潔に述べさせていただきたい。

私の参加した了祥班は、日本人と海外の方がそれぞれ約２～３名ずつの班である。大谷大学の井上尚実先生が指導教員として中心になり進められた。了祥班は2017年夏に開かれた第２回ワークショップから新設された班であるが、そこから今回までの約半年間、井上先生と大谷大学大学院生数名、龍谷大学から１名のメンバーで『歎異抄』第１章から第３章途中までを了祥の『歎異鈔聞記』（1828）を使って、日本で既にまとめたものを用意した形で参加した。実際、そのメンバー全員がバークレーでも了祥班として参加したわけではないが、私は第２回から一貫して了祥班として参加してきたため、事前の準備が大いに役に立った。

具体的な進捗状況としては、まず、『歎異抄』著者問題に関する了祥の功績を今回のワークショップでは提示することができた。了祥以前は深励等が提唱する如信説が有力であった。了祥自身も最初は『歎異抄』の著者を如信と考えていたが、後に考えを改め、『歎異抄』の著者が如信ではなく唯円であることを提唱した。現在ではこの唯円説が定説として扱われていることを考えれば、了祥班としてはこの功績をまとめることができたことは大きいと思う。また、各章の進め方に関しては、『歎異鈔聞記』（1828）では基本的に『歎異抄』の文を細かく分けて随文解釈のような形でひとつひとつ解説が施されているため分量はかなり多くなっている。本来なら『歎異鈔聞記』（1828）の文をそのまますべて英訳していくことが求められているのかもしれないが、了祥班ではそのような方法は採用せずに、了祥にしか見られないよう解釈の部分を中心的にピックアップしながら英訳をしていった。了祥は他の円智、寿国、深励に比べると時代を後にする人物であり、彼らが既にまとめ上げた意見を踏襲しながら自身の考えを述べている。中でも深励の意見に対してはかなり批判的に見る態度があり、そういった部分は了祥の意見として大切な部分となるため厳密に見ていった。中でも、『歎異抄』第３章に関しては、中心となる「悪人正機」について、この説を親鸞のオリジナルの教えとしてみるか、法然から伝えられた教えとしてみるかという議論がある。これについて、了祥以前の江戸期の講義録でも親鸞のオリジナルの説ではなく、悪人正機の考えが法然に既にあったことを主張しているものは存在する。しかし、了祥の場合は『浄土安心詮要鈔』の中に、当時まだ発見されていない所謂『醍醐本』に「善人尚以往生況悪人乎事　口伝有之」という記述があるということが記されているということを根拠とし

て、悪人正機を法然から伝えられた教えであると主張した。この功績の信憑性についても了祥班としては今後更なる検討を重ねながらまとめていきたいものである。

最後に、現在４班に分かれて研究を進めているが、各班ごとに進みの差やまとめ方の差があることは今後改善していく点であると感じた。しかし、今回私自身は初めての海外研修であったが、海外にはこんなにも真剣に真宗学を研究されている方がいるのかと驚かされた。バックグラウンドの違いがこんなにも大きい中で、英語を母国語として生活する人たちが日本語の、しかも古文でかかれたものを読み、理解して、英語に訳していく姿に、僧侶になる自分はもっとがんばってこのプログラムに協力していかなければいけないと思った。

本学大学院博士後期課程真宗学専攻第一学年の鶴留正智氏の参加報告は以下の通りである。

昨年に引き続き、カリフォルニア大学バークレー校で開催された『歎異抄』ワークショップに参加した。今回、円智（?–1670）の『歎異抄私記』を英訳する部会に参加し、『歎異抄』第２章から第３章の冒頭にかけて理解を追った。

現在このワークショップには４つの部会があるが、分量が少ない円智と寿国のテクストは全訳が試みられている。さて私が参加した円智であるが、今回、先行する英訳文献をできるだけ反映させるように心がけた。英語圏での浄土教研究を窺えば、浄土三部経をはじめとして、いくつかの英訳された浄土教関連テクストがある。すでに『歎異抄』に用いられている術語が英訳されていることも多い。『歎異抄』の講義にあっては、どのようなテクストの影響下に著述されたか考察するため、近世および近現代とも、さまざまな経典、論書などの仏教テクストを引用することが常である。これらの引用されたテクストを英訳に反映させる場合、それを一から構築するのではなく先行訳に敬意を払い、先にもたらされた概念を引き継いだ方が時間的にも良い。また学術的規範を考慮しても、むやみに新しい概念を導入することはいたずらな議論の錯綜を呼び、先行研究との繋がりが希薄になってしまうのではないだろうか。とはいえ、善導『観経疏』やそれに源信『往生要集』などはまだ学術的英訳が公刊されていない。

成果発表セッションの様子

このワークショップへ臨むにあたり、円智だけではなく、了祥の『歎異抄』理解を井上尚実先生の指導の下に検討してきた。了祥は『歎異抄』講義の最初期に位置する円智とは異なり、深励などの影響を受けた近世『歎異抄』講義の最終期に当たる。ただし彼の研究態度は、その師、深励をも批判的に捉え、学術的である。そうであるから、了祥を読む際、深励を初めとする了祥以前をおさえることが求められる。そもそも了祥の著作自体が膨大であって、著名な天保 12（1841）年開講の『歎異抄聞記』だけでなく、文政 11（1828）年の『歎異抄聞記』や、細川行信が注目した『歎異抄耳飡』なども近年発刊されている。これら了祥の講義は『歎異抄講義集成』全５巻の内、３巻分を占める。そのような事実に基づけば、了祥を読むことは近世の『歎異抄』理解を総ざらいし、近代の理解へ進むことといって過言でない。

この事前の了祥研究会では、主として文政 11 年の『歎異抄聞記』にハイライトを施し、その箇所を英訳する作業を行った。ワークショップ期間中には参加できなかったが、期間中には米国の研究者がその翻訳を確認したと聞いている。文政 11 年にはまだ深励の影響が色濃く残り、例えば著者について（了祥はその著者が唯円であると決定させたことで有名であるが）深励と同じく如信説を採用している。一方、『歎異抄』第３章の悪人正機説が法然に求められることを（原本を確認できていないにも関わらず、他の記事からの推測によって）『法然上人伝記』（醍醐本）に見られるようであると指摘している点などは、悪人正機説が法然に遡れることを指摘する近代を先取りしているともいえそうである。

そのようなわけで、今回、事前には了祥の理解を確認し、ワークショップ期間中には円智の理解を翻訳する作業に従事したが、そのことによって近世の宗学について、それが現代に通ずる意義を有しているという理解が深まったことは大きな収穫である。『歎異抄』に関してすぐれた現代的理解があることはもちろんであるが、やはり時代を追って丁寧にその研究史をおさ

えることは学問として重要であり、それなくして『歎異抄』研究の輸出、真宗学の国際化もあり得ないのだろう。

以上のように、参加した学生は、ワークショップやそれに向けての事前研究会において、多くを学び、近世の宗学者の書物に対する理解を深めている。

３月５日㈪に、参加した学生と井上教授は、バークレー市内にある毎田仏教センターおよびバークレー東本願寺を訪問し、そちらで開教活動に従事されている方と交流した。

第四回のワークショップは、龍谷大学を会場に、2018年６月22日㈮から24日㈪まで開催されたが、その報告は次回に譲る。

アメリカ宗教学会参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway

2017年11月18日㈯から21日㈫にかけて、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン市にて、American Academy of Religion（アメリカ宗教学会）の年次大会が開催された。筆者は、アメリカにおける仏教研究の動向を把握し、仏教研究に取り組んでいる学者と研究交流を行うために、11月17日㈮から22日㈬まで渡米し、学会に参加した。

アメリカ宗教学会の年次大会では、世界中から多様な関心を持つ研究者が7,000名ほど集い、研究発表部会を中心に研究交流と情報交換を行う。参加人数に応じて、ボストン市の最大の国際会議場（Hynes Convention Center）および周囲のホテルの会議室が会場となる。９時から夕方の６時の間で、凡そ４セッションが開かれ、セッション毎に、約45部会が同時に開催されている。

筆者は、仏教関連の部会に絞って参加したが、仏教を主題とする部会も多く同時に開催され、関連発表を全て聞くことができなかった。日本仏教史を中心とした部会、チベット仏教の論理学や唯識思想についての部会など、従来の仏教文献学や宗教史学の研究発表が多く行われていたが、それに加えて、近年、日本仏教について本を刊行した若手研究者の体験談など、研究者としてキャリアを積む時に実質的に役に立つ情報を共有する機会もあった。この報告書には、参加した部会の一つ一つの内容について詳しく紹介することができないので、特に印象に残っている部会に関して二つだけを取り上げ、それらについて少しばかり考察したい。

先ず、19日㈰の午後１時から、2017年に刊行されたポール・スワンソン教授（南山大学）の『摩訶止観』英訳を評価する部会が開催された。スワンソン先生が30年以上かけて、完成させた大部な翻訳には、綿密な注釈も施され、今後の英語による仏教教義学研究に多大な貢献をするであろうと、仏教研究界を率いる著名な発表者から絶賛された。そして、質疑の際、仏教研究における翻訳の重要性が話題となり、翻訳を研究業績として認めない近年のアメリカの大学業務評価制度を見直すべきだという声も、多方面より上がった。近年の北米の仏教関係の大学院教育では語学の壁を低くするため、教理研究が遠ざけられてきたが、この部会での議論はその風潮に変化が生じる兆しのように思われる。

また、19日の午後５時からのセッションでは、「Situating the Dharma: Examining Power, Privilege, and Identity in American Buddhisms」（法の文脈化―アメリカの諸仏教における権力・特権・アイデンティティを審査して―）という題でパネルディスカッションが行われた。ナタリー・キリ氏（米国仏教学院研究員）は、アメリカにおける仏教の普及の過程において、

アムスタッツ先生の奥様と筆者

社会的に有利な立場にいる者が実権を握り、本来の仏教が何なのかということを決め付けてきたことを指摘し、社会的弱者のアジアからの移民の信仰形態を否定し、非本来の仏教、または堕落した仏教と非難してきた事例をも取り上げた。また、黒人でチベット仏教の僧侶であるロッド・オエンズ氏（ダルマ・ボストン・サンガ）は、「あなたが所属しているサンガに、人種的多様性がないならば、あなたは人種差別をしているサンガに所属していますよ」とまで述べた。これらの議論を聞いた時に、日本国内外の真宗大谷派の実態が思い浮かび、「バラバラでいっしょ」というスローガンを掲げながらも、その実現からまだまだ遠いと感じざるを得なかった。その厳しい問いかけを、開教現場だけではなく、日本国内でも充分に受け止める必要があるように思う。

21日㈫に大会が終了してから、ハーバード大学で研究と教育活動を続けている目片祥子氏に会い、そして東方仏教徒協会の編集顧問のゲーレン・アムスタッツ先生のお宅を訪ね、英語圏における真宗教化活動の限界と可能性について種々に議論した。

以上のように密度の濃い４日間を通して、多く教えられ、考えさせられた。

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく海外研究調査報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授　井黒　忍

真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく共同研究のため、2018年３月３日㈯から７日㈬までの間、松川節教授ならびに三鬼丈知任期制助教（当時）の２名を特別招聘者として中国社会科学院歴史研究所に派遣した。派遣期間中においては、白雲観など北京市内の元代の史跡を訪ねたほか、中国側研究者との共同でのモンゴル語碑文の解読作業や中国国家図書館での資料調査を行った。さらに３月６日には、中国社会科学院歴史研究所において研究会が開催され、松川節教授と三鬼丈知助教が研究報告を行った。両報告の概要は下記の通りである。

松川節「最近モンゴル国発現の若干の碑刻・岩壁銘文について」では、モンゴル・日本共同「ビチェース（＝碑文）」プロジェクトは、1994年以来、モンゴル国に存在する突厥・ソグド・ウイグル・契丹・モンゴル帝国・元朝時代の碑文・岩壁銘文の探索・記録・研究を行ってきており、今年で24年目を迎える。その成果は日本側から公刊したものだけでも、単行本５冊と数多くの学術論文があり、また一般向けにプロジェクトの内容を紹介したパンフレット２点がある。現在までに50点以上の碑文・摩崖銘文の調査・記録・研究を行ってきており、最近の調査・研究成果としては、１）ホブド県ムンフハイルハン郡ドローン・ノールのオラーン・トルゴイのシリア文字・漢文摩崖銘文、２）スフバータル県トゥブシンシレー郡ドンゴイン・シレー遺跡の契丹小字墨書、３）ドンドゴビ県デルゲルハンガイ郡デルゲルハンガイ山の漢文摩崖銘文、４）ボルガン県モゴド郡フイス・トルゴイ碑文がある。世界中の様々な専門分野の研究者が参加していることがこの研究の特色であり、今後もモンゴル国から未知の文字資料が発現する可能性がある。同時に、これらの文字資料・考古資料をいかに保存・保護していくかという課題も重要である。

中国社会科学院歴史研究所での三鬼丈知氏の研究報告

三鬼丈知「中国医学における身体図像の展開について」では、現在中国医学において用いられる身体図は、身体を正面・背面・側面の三方向から見て描き分けた経脈図（仰人図・伏人図・側人図）、及び側面からの視点で、四肢を省略した臓腑図（「臓腑側面図」と称す）

の四枚で構成されるのが一般的である。仰人図・伏人図・側人図の形式の図は唐代には行われていたが、その図はすでに失われている。図は伝わらないが、唐代の三人図は、四肢の経穴や経脈のルートを色分けして示した図で、臓腑もその内に書き込まれていたらしい。一方、「臓腑側面図」は、道教内丹術の影響を受けて「三人図」よりも遅れて成立したものが、後に臓腑図として用いられるようになったと考えられる。というのも、この図は鍼灸治療の穴位が示されるはずの四肢が省略され、むしろ内丹術に必要な知識を図示するものであり、また、現存する図も明代以降のものしか見られないためである。王好古『広為大法』（1234年）は、明らかに道教内丹術の影響を受け、元来別々に描かれていたはずの頭部と軀幹を接続して臓腑を描き入れた経脈図を収めている。これは「臓腑側面図」の淵源を示すものであり、中国医学において用いられる身体図の歴史的展開について考える上で極めて重要なものである。

中国蔵学研究中心出張報告

西蔵文献研究　研究員・講師　上野 牧生

2018年3月26日㈪から3月28日㈬までの3日間、研究代表者・三宅伸一郎とともに、中国・北京に出張した。今回の出張の主たる目的は、中国におけるチベット学の拠点である中国蔵学研究中心を訪問し関係者と面会、今後の研究交流に向けた話し合いをすることであったが、同時に、中国蔵学研究中心を含めた中国・北京に存在する研究機関に在籍するチベット学者らと面会し、最新の研究成果に関する情報収集にも努めた。以下、日程に沿って今回の出張の報告をおこなう。

3月26日：NH979便（関空09：45-北京13：00）にて北京国際空港へ。空港到着後、タクシーにて西蔵大厦にチェックイン。チェックイン後、中国蔵学研究中心（以下、センターと略記）に向かった。16:00より、センターにて、総幹事（＝所長）のダムドゥル博士、センターの宗教研究所研究員である李学竹博士、社会経済研究所研究員である万德卡尔氏、及び秘書の張氏と会談。李氏の通訳にて今後の学術交流について話し合った。特に、センターでは通例、センターと各大学との間で「総協議書」を締結した後、具体的な研究課題を明記した「子協議書」を締結しているため、大谷大学との学術協定もその形式に則りたいとの提案がなされた。その提案に対し、大谷大学に持ち帰り検討すると回答した。続いて、白館戒雲名誉教授の蔵書がセンターに寄贈される件に関して、大谷大学真宗総合研究所の協力に対してダムドゥル博士より謝辞が述べられた後、寄贈及び荷物の運搬の具体的な手続きについて協議した。会談の終了後、19:00より会談に臨んだメンバー全員で、センター内部のレストランにおいて夕食を共にした。

3月27日：午前9:30より、秘書の張氏の案内のもと、センターに設置されている西蔵文化博物館を見学。

中国蔵学研究中心総幹事ダムドゥル氏より
歓迎のカタ（絹のスカーフ）を受け取る

会談の様子。写真はともに中国蔵学研究中心提供

10:30 より、センターの実務者である李博士・張秘書と会談を行った。まず、李博士から総協議書のたたき台の提供を受け、その文言を確認した。続いて、上述したセンターでの通例を承け、総協議書は大谷大学学長とセンターの総幹事が署名、子協議書は真宗総合研究所所長とセンター内部の宗教研究所所長とが署名する案が提示された。この提案についても、持ち帰り検討すると回答した。センター内部の食堂での昼食を挟み、13:00 より再び会談を行った。そこでは、センターが作成した総協議書・子協議書の雛形の提供を受け、その具体的な文言の確認と、予想される課題点について協議した。そして最後に、協定締結に向けた具体的なスケジュールについて協議した。16:00 に会談は終了した。会談の終了後、18:00 より、4 月に来日予定の万德卡尔氏らとセンター近くのレストランにて会食した。

3 月 28 日：午前、民族出版社の書店にてチベット語資料を購入した後、西蔵大厦をチェックアウト。タクシーにて北京国際空港へ。NH980 便にて帰国した。

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院訪問と中部フエ地区の寺院調査、並びにベトナム文化芸術院フエ分室訪問報告

ベトナム仏教研究　研究代表者・教授　織田 顕祐

2018 年 2 月 25 日㈰から 3 月 3 日㈯の日程で、織田顕祐（研究代表者）と釆睪晃（研究班庶務・当時）が訪越し、大西和彦嘱託研究員と現地で合流して訪問調査を実施した。今回の訪越の目的は、主としてベトナム中部フエ地区における仏教研究の実態の把握、並びに同地区の寺院の様子を調査することである。これまでは、北部ハノイを中心に寺院調査と研究交流を模索してきたが、今回はそれを中部フエ地区に広げようとするものである。以下事柄別に今回の訪問調査の結果を報告する。

◯宗教研究院訪問（2 月 26 日午前中）

現在病気療養中のグエン・コック・トゥアン旧院長の病状を把握し、「ベトナム仏教概説」の今後の進め方について協議した。また、本学の「研究ブランディング事業」を一通り説明した。先方としては、具体的な「セミナーかシンポジウム」を共同開催し、それを広報することが最も効果的であり、テーマ･方法によっては、国家の宗教委員会の関与も可能となるだろうということであった。

◯フエ地区の仏教研究の実態の把握並びに同地区の寺院調査（2 月 27 日～3 月 2 日）

27 日午前中フエに移動し、午後予定通り寺院調査を始める。最初に天姥寺を調査。フエ地区の象徴的な寺で阮朝の官寺である。ハノイの複雑な内陣形式に比べて、釈迦牟尼を本尊としたシンプルな形式である。次に宝林寺を調査。同寺の版木はフエの仏教雑誌『了観』第 7 号に一応報告がなされていたので、現物を確認することとなった。「毘尼日用」「潙山警策句釈記」「沙弥律儀要略増注」などの名称を確認する。「沙弥律儀要略増注」には「中国広州の海幢寺」版を再版したことが記されていて、この地と中国南部の仏教的交流の足跡を示している点が興味深い。

28 日午前中「ベトナム文化芸術院フエ分院」訪問。チャン・ディン・ハン院長、グェン・ヒュー・トン前院長らと懇談。チャン院長からフエの独自の仏教文化に関する講話を拝聴。続いてグェン前院長からフエ仏教の概説を聞く。北部はダン チョン（“内”のという概念らしい）という概念に基づき大乗仏教研究が中心（これは宗教研究院が担当）。中部はダン ガイ（“外部”）に基づき本分院が担当しているとのこと。中部仏教の特色は、①チャム・チャンパーの基層文化の上に北方越系の仏教が重層している。②女神化した観音信仰などが北部から伝わり民間信仰と融合している。③ 20 世紀の仏教振興運動（仏教と民間信仰を区別し仏教の特徴化を推進しようとした）もこの地と大いに関係が深い、とのことである。また、フエには約 3000 枚の仏教に関する版木が現存しており、一応の調査は済んでいるが内容の研究はまだであり、この点について相談を受けたので、「フエ現存仏典版木集成」のようなもの出してもらえれば内容の研究は早いと提案した。同日午後は、慈曇寺（ベトナム仏教協会フエ本部が置かれている寺院）、慈孝寺（阮朝の宦官が建立した寺）、

禅林寺（1695年に広東からやって来た大汕石濂が戒壇を築いた故地）、報国寺（古くからの中心的な学問寺院で住職はフエ仏教協会の会長）等を訪問調査した。

３月１日は引き続き、フエ市内の主な寺院である、妙諦寺（1847年建立の阮朝の官立寺院で「御製詩　題妙諦寺」と題する巨大な石碑がある）、国恩寺（阮朝官立寺院。17世紀に臨済宗を将来した原韶禅師ゆかりの寺院）、禅尊寺（18世紀にフエに曹洞宗を伝えた了観ゆかりの寺院）などを訪問調査。その後、チャン・ディン・ハン院長の示唆によって「フエ仏教大学」を訪問した。校舎は新しく寄宿舎も完備しているが、現状ではホーチミンの仏教大学とはかなりの隔たりがあると感じられた。夕刻、慈曇寺を再訪問。これは了観仏教センター（雑誌『了観』編集局を兼ねる）の海印禅師の特別の要請によるものである。海印禅師はフエ仏教大学の事務室でもお会いしたが、我々の訪問目的を理解され特に時間を取られたのである。同師によれば「了観仏教センター」は1992年に開設され、①仏教文化興隆、②ベトナム仏教史、③投稿を中心に雑誌を編集し、その他各種のセミナー等を開催し、フエの文化センターの役割を担っており、フエのすべての寺院が参加しているとのこと。海印禅師は、今後の活動として、①資料文書を正しく保管管理したい、②現存各資料の内容の研究を進めていきたい、と話しておられた。今回のフエ調査における最も重要な出会いであった。

フエ仏教大学にて

３月２日は午後ハノイに戻るため、調査は午前中のみ。約１時間フォン河を遡り、ディン・フォン・チェン（玉杯殿、フエの道教の女神の神殿、恵南殿とも言う。もともとチャム族が信仰したシバ神が道教と習合して天依阿那と呼ばれ、それが北部の水神と習合したものが御神体）を現地調査した。夕刻３時ころ航空機にてハノイに戻り、３日の早朝便にて帰国した。

タイ国王室寺院 Wat Liap、Wat Phitchaya Yatikaram 及び Wat Phra Chettuphon ほか 所蔵の貝葉写本に関わる共同研究調査

デジタル・アーカイブ資料室　嘱託研究員　清水 洋平

デジタル・アーカイブ資料室では、100年余り前のタイ王室より寄贈されたパーリ語貝葉写本（「大谷貝葉」）及びその包み布の包括的な調査を行っている。その調査では、今までに判明していなかった点が複数明らかになってきており、特に貝葉写本に記載されていた寺院名が判読された点は重要である。それを受けて、今回の現地調査では、「大谷貝葉」に記載のあった寺院 Wat Liap（Wat Ratchabrana）を訪問し、同類写本の所蔵状況などを確認し、「大谷貝葉」との関係を示す手掛かりを調査する。同じく「大谷貝葉」の来歴に関わる可能性が高い寺院 Wat Phitchaya Yatikaram も訪問し、同様の調査を行う。尚、「大谷貝葉」の稀覯文献抽出作業の一環として、以前より共同研究調査を行っている第１級王室寺院 Wat Phra Chettuphon（通称 Wat Pho）の Phra Rajapariyattimuni（Prof. Ven. Thiab Malai）長老（マハーチュラーロンコーン大学仏教学部長）等とも、稀覯文献抽出作業の今後の打ち合わせが必須である。今回の調査は、これら３点の調査・共同研究を実施することを目的としている。

2018年３月14日㈬から３月21日㈬にかけて、バンコク所在の上記した寺院を中心に調査を実施した。本調査は、同嘱託研究員の舟橋智哉と共に、寺院側との交渉や通訳などの協力者として Dhammachai Institute の Dr. Chaowarithreonglith Bunchird 氏、同 Dr. Srisetthaworakul Suchada 氏の助力を得ながら実施した。

３月15日に、上記したWat PhoのProf. Ven. Thiab Malai長老と「大谷貝葉」の来歴についての意見交換、並びに稀覯文献抽出作業に関わる今後訪問すべき寺院等の打ち合わせを行った。その後、同長老から、今回訪問予定の寺院において協力してくださる各寺院の長老を紹介して頂き、調査をスタートさせた。

第２級王室寺院Wat Liapでは、マハーチュラーロンコーン大学インターナショナルプログラムの責任者で副住職のPhra Sithawatchamethi (Chana)長老と面会し、同寺院の歴史や所蔵写本についての話を伺った。現在の写本の所蔵状況については、実際に厨子を開けて写本を見せながら説明してくださり、「大谷貝葉」との比較可能な写本リストの存在についても情報を提供してくだされた。また、同寺院が第二次世界大戦の折に爆撃を受け、貴重な文物の多くが失われたことや、その状況の中で貝葉写本の多くが、第１級王室寺院Wat Suthatに移されたという情報も得ることができた。

Wat LiapのPhra Sithawatchamethi長老と筆者

第２級王室寺院Wat Phitchaya Yatikaramでは、Phrakru Wisitsorakan（Jakraphan Songsaeng）長老から、同寺院の歴史や所蔵写本についての話を伺った。ラーマ７世期（在位1925-1935）から25年間、同寺院は破棄され様々なものが失われたとのことであった。また、現在はマハーニカーイ派だが、破棄される以前はタマユット派であったという話も伺えた。この情報は重要であり、「大谷貝葉」の来歴に関わる真宗大谷派の学僧生田(織田)得能のタイでの出家は、タマユット派であった可能性が窺えるのである。

その他、タマユット派の総本山で第１級王室寺院Wat Bowornniwetも訪問した。Phra Shakyavongsvisuddhi (Anil Sakya)長老（マハーマクット仏教大学外交審議部門副学長）と面会し、同寺院の所蔵写本について意見交換を行った。また、同長老から「大谷貝葉」の研究推進に資するようにと同寺院所蔵の写本リストを頂いた。このリストを入手することは非常に困難とされるため、このような重要な資料が入手できたことは今後の「大谷貝葉」の研究・稀覯文献抽出作業を推進する上で非常に役立つものであり得難い経験であった。

今回の調査で得られたこれらの貴重な情報を、「大谷貝葉」の研究促進に活かしていきたい。

東方・西方両教会の修道院における「祈りと労働」の実践調査

東京分室PD研究員　松澤 裕樹

2018年２月28日㈬から３月16日㈮にわたり、ギリシアのアトス山にある東方正教会の各修道院（３月３日～６日）とベルギー南部にある西方教会のトラピスト会（厳律シトー会）オルヴァル修道院（３月９日～13日）に東京分室のPD研究員３名が滞在し、東方・西方両教会における「祈りと労働」を中心とする修道院生活の実地調査を行った。

本調査の目的は、東方・西方両教会の修道院における「祈りと労働」の実践について調査することにより、キリスト教神秘思想の文書群を生み出したその背景にある実践的側面の具体的内容を明らかにすることにあった。また、宗教において紡ぎ出される言葉の源泉である宗教的実践を実際に体験することで、宗教における言葉の意義をより多層的な観点から把握できるようになることも本調査から期待できる成果であった。以降、当調査の一部を報告する。

３月３日：船でアトス山のダフニ港へ。港からバスで主都カリエスに行き、タクシーでメギスティス・ラヴラ修道院へ。受付で歓待の印としてギリシアコーヒー・ウゾ・ルクミの三点セットを頂く。礼拝五分前の合図となるシマンドロの音が修道院全体に鳴り響く。教会内は入口付近の聖所と奥にある至聖所に分か

れ、至聖所への入口は布が掛かり、非信徒の入室は禁止されている。礼拝では、蝋燭で照らされた薄暗い空間の中で、一人の修道士が中世ギリシア語で祈祷文を絶えず唱える中、香炉を持った修道士がイコンと礼拝参加者全員に香を振り撒き、修道士と信徒たちが教会内に掲げられた複数のイコンに口づけして回るという典礼様式が取られる。我々が訪問した季節は、断食が奨励される復活祭前の四旬節にあたり、修道院では一日一食で油を使用しない料理を基本とし、週末は例外的に一日二食となる。食事は基本的に修道院の畑で自給自足しており、パン・野菜の煮込み・オリーブ・葡萄酒・果物という質素なものであった。食事は一人の修道士が朗唱している間に沈黙の中で食し、十分ほどで朗唱が終わると皆起立し、再び食後の礼拝のため聖堂へと向かう。夕食後、修道士見習いK氏にインタビューを行う。当修道院には四十五人の修道士と数人の修道士見習いがおり、修道士見習いが修道士になるには約一年の期間を要するが、その期間や受入可否は全て指導する修道士が判断する。修道院の一日は、午前三時半の礼拝で始まり、それが午前八時（日曜は九時）まで続く。朝食と食後の礼拝以降は各々の祈りと労働の時間となる。午後三時半から五時まで再び礼拝。夕食と食後の礼拝以降は各々の祈りの時間となる。K氏は一貫して東方正教会の正統性を主張し、西方教会の様々な誤謬について語っていた。

３月４日：午前三時半からの礼拝前、ロシア正教徒のポーランド人A氏にインタビューを行う。ギリシア正教の典礼語は現代の一般信徒には理解不能だが、ロシア正教の典礼語は十七世紀の言葉なので現代の一般信徒も理解可能であり、典礼における一般信徒の関わりが異なる。神学者グレゴリオス・パラマスの思想的影響が今でも最も大きく、それは典礼で重要な位置を占めるイコンの存在意義をパラマスが初めて論証したことによる。『フィロカリア』は東方正教会の様々な修道士が記した霊的散文集であるが、ポーランドでは無神論者たちにも霊的修練への指針として幅広く読まれている。

礼拝後、カラカルー修道院に向かう。ルーマニア人修道士F氏よりアトス山を日本に紹介してほしいとアトス山修道院に関するDVDと典礼音楽のCDを頂く。その後、徒歩でフィロセウ修道院、イヴィロン修道院に向かう。途中、修道士が一人で修道生活を行う修道小屋（ケリ）を訪問するが不在。

目的地であるクトゥルムシウー修道院に到着後、午後三時半より礼拝に参加。夕食では修道士と信徒との食事が許されず、別室で食事を頂く。非信徒への扱いは修道院ごとに異なる模様。食後の礼拝後、修道士B氏に本来信徒しか入室できない至聖所を案内してもらうとともにインタビューを行う。当修道院には二十五名の修道士がいる。至聖所の正面奥は聖母子像がある修道院が多いが、東方正教会がマリア中心主義を有しているわけではなく、教会の中心にあるドームの真上に描かれたキリスト像が最も重要な位置を占める。イコンは象徴的な意味を有しており、例えばイエスの両脇にモーセとエリアが描かれたイコンでは、モーセによって法が、エリアによって預言が象徴される。しかし、イコンに描かれた対象だけではなく、イコンそれ自体が象徴であり、それが道となって神とのつながりが開かれる。また、図像だけがイコンではなく、神の働き（エネルゲイア）を受けた人間を含めたあらゆる被造物がイコンであると捉えており、被造物を通して神と直接的なつながりに入ることが可能である。それに対して、西方教会では、恩寵を神の働きではなく被造物とみなすため、神と直接的なつながりを持つことはできない。東方正教会では、人間が内的に神のエネルゲイアを受けているので、誰にでも神化への道が開かれている。そのためにヘシュカスムという静けさが必要であり、沈黙を保つとともに日々の祈りを通してその境地に近づいていく。しかし、それは身体を使った瞑想とかテクニック的な問題ではない。テクニックが重視されると自己中心的となり本末転倒になってしまう。西方教会では、神秘主義的な要素と典礼的な要素が分離しているが、東方正教会ではそれらが一つとなっている。

３月５日：午前三時より礼拝に参加。礼拝後、カリエスからダフニ港に行き、船でグリゴリウ港に向かう。グレゴリウ修道院を通過し、徒歩でディオニシウ修道院へ。修道士C氏に礼拝堂を案内してもらう。紀元一世紀ルカが描いたとされるイコン（真偽不明）に関する説明を受ける。アギウパウル修道院を経由し、目的地であるアギアアンア小修道院（スキテ）に到着。スキテとは、アトス山修道院直属の下部組織であり、五人程度の修道士が共同生活を送る小修道院である。同スキテはメギスティス・ラヴラ直属の小修道院であり、四旬節の間は週三日のみ礼拝が行われる。同スキテに宿泊していたギリシア人信徒にインタビューを行う。アトス山の修道院には、有名な修道士が数名おり、彼らに助言をもらいにアトス山巡礼をする信徒が多い。また、修道院にはそれぞれ異なる御利益のようなものがあり、我々が滞在した当スキテは子宝に御利益があり、子に恵まれない男性がここに訪れると四十日以内にその妻が妊娠すると信じられている。

３月10日：ベルギー南部のオルヴァル修道院で、午前五時より第一礼拝（Vigils）に参加。修道士がフ

ランス語で聖歌の独唱と合唱を繰り返す典礼形式をとる。修道院滞在中は常に沈黙が求められる。朝食後、午前七時半より第二礼拝（Lauds）に参加。午前十一時半より第三礼拝（Sext）に参加。第三礼拝で聖餐式が行われる。午後五時半より第四礼拝（Vespers）に参加。夕食後、午後八時より第五礼拝（Compline）に参加。食事は、修道士とは別の部屋で他のゲストと共に頂く。修道士が食事前の祈りと給仕を行っており、ゲストへの奉仕もまた修道士の労働の一部となっている模様。食事は当修道院で製造・販売されているトラピストビールとチーズ以外は外で購入したものを使用している。食事後は、ゲストで協力して後片付けを行う。

３月 12 日：当修道院長Ｌ氏にインタビューを行う。当修道院が属するトラピスト会は、十七世紀にシトー会から分裂する。それはシトー会が発足した十二世紀の在り方に戻ろうとするリバイバル運動であった。修道士の生活の基本は「祈りと労働」であり、当修道院の労働はビール製造を中心とし、ビール販売での収入は修道院における全収入の八割を占める。修道院は自活を基本とし、信徒からの喜捨は修道院のために使用せず、全額貧しき人々に喜捨する。修道士はキリスト教共同体という一つの体である役割をなす一部分にすぎないゆえ、一般信徒との関わりを重視しており、異教徒にも門戸は開かれている。亡命していたチベット仏教の僧侶を受け入れたこともある。仏教では欲望を苦の原因として否定するが、キリスト教ではそれを肯定して、生きる力、他者へと働く力に変えていく。善い欲望は愛と同じである。祈りと瞑想は異なる。祈りは共同で行うものであり、瞑想は個人による神との一対一の対話である。対話の際に父なる神を対象的に捉えるのではなく、肉体を持ったキリストの行動・言葉を通して神に祈る。超越者である父と対話するためにキリストを媒介とし、祈りにおいては、人間に内在する聖霊の働きが重要となる。修道士の目的は神に似ることであるが、西方教会では神の似姿としての人間よりも原罪を有する人間に重点を置き、東方正教会ほど神化を強調しない。一方、東方正教会は、神の似姿としての人間理解に強く重点が置かれており、キリストは救済者というよりも我々の模範としてみなされ、神化が修道生活の目的となっている。

カラカルー修道院で修道士Ｆ氏とともに

以上、全く異なる文化的背景の中で発展してきた東方正教会と西方教会は、その修道院生活においても全く異なる様相を呈していることが明らかとなった。これらの実地調査から得た知見に基づいて、今後より複層的な観点から宗教と言語に関する研究を進めていきたい。

海外研究調査報告（ベルギー・ドイツ）

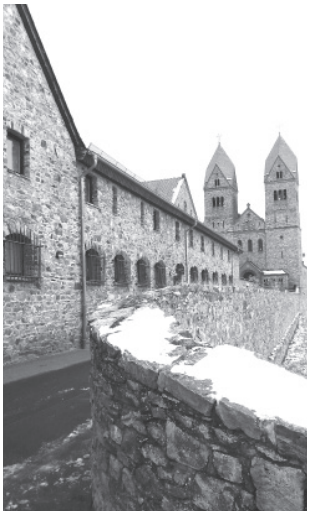
東京分室 PD 研究員　松澤 裕樹

2018 年３月 15 日㈭から 19 日㈪にかけて、ベルギーとドイツで個人研究に関する調査を行った。15 日には、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学の中央図書館で中世フランドル神秘主義関連の文献を調査した。また、ルーヴァン・カトリック大学神学部の研究員で中世フランドル神秘主義の専門家である菊地智氏と会談し、中世フランドル神秘主義の最新の研究状況に関する情報を得た。また、12 世紀フランドルの神秘思想家サンティエリのギョーム研究の第一人者である元アントワープ大学教授 Paul Verdeyen 氏とも会談し、ほぼ同時代に生きた親鸞とギョームの思想的連関について話し合った。

翌日の３月 16 日から２日間、ドイツのケルンで開催されたマイスター・エックハルト学会の年次大会に参加した。今年の研究大会のテーマは「ケルンにおけるマイスター・エックハルト」であった。ドミニコ会の高等神学院院長としてその晩年をケルンで過ごしたエックハルトの足取りは、未だ完全には解明さ

れていないが、当研究大会ではそれに関する最新の研究結果を聞くことができた。エックハルトのドイツ語説教はその多くがケルン時代になされたものであり、ドイツ語説教と民衆との関わりについて研究を進める私にとって非常に有意義な研究大会であった。また、昨年11月にドイツで出版された拙書『Die Relationsontologie bei Meister Eckhart』が、エックハルト研究者の間で既にその存在が知られていることに驚いた。今回の研究大会は、ケルン大学に併設されるトマス研究所が主催しており、これまで関わりの持つ機会のなかったトマス・アクィナスの若手研究者たちと交流を持つことができたのは嬉しい出来事であった。翌18日には、ドイツのライン川沿いの町リューデスハイムにあるヒルデガルト・フォン・ビンゲン修道院の調査を行った。女子修道院のため、修道女が生活する修道院内部には入ることが許されなかったが、修道院併設の教会や図書室などは見ることができ、ドイツ神秘思想の源流とも言えるヒルデガルト・フォン・ビンゲンの思想と生活環境について理解を深めることができた。

ケルン（ドイツ）におけるエックハルト学会年次大会の様子


リューデスハイム（ドイツ）の
ヒルデガルト・フォン・ビンゲン
修道院外観

国際シンポジウム参加報告（韓国外国語大学）

東京分室PD研究員　松澤 裕樹

2017年12月15日㈮から17日㈰にかけて、韓国外国語大学龍仁キャンパスで開催された国際シンポジウム「CORE International Conference: Interactive Influence of East-West Thought as Mutual Exchange of East-West Culture」に参加してきた。当シンポジウムでは、研究領域の異なるアジア・ヨーロッパ・オセアニアの研究者が一堂に会し、様々な観点から東西思想の相互的影響に関する関する発表と議論が行われた。私は日本からの唯一の発表者として「The Influence of E. Swedenborg on the Concept of Spirituality in D. T. Suzuki」という題目で研究発表を行った。当シンポジウムで最も印象に残ったのは、他のアジア諸国の研究者との関わりであった。私が以前ドイツに留学していた際には、西洋の思想を現地で学ぶことだけに意識が向けられており、同じく西洋で学んでいる他のアジア人に対して特別意識を向けることはなかった。しかし、当シンポジウムでアジア人研究者と交流を持つことで、我々アジア人が西洋の思想を学ぶ意味は一体何なのかという根本的な問題について改めて考えさせられた。様々なアジア人研究者との議論を介して、我々は東洋特有の思想を有しているが、それを伝達するための論理や概念を西洋から学ぶ必要があるという点で意見が一致した。今後、西洋の論理や概念を修得したアジア人研究者が協力して東洋思想を現代的に発展させていく可能性が大いに期待できる有意義なシンポジウムであった。今回の経験により、今後は欧米とのつながりを重視するだけではなく、より身近にいるアジア人研究者との共同研究ということも視野に入れつつ研究を進めていく必要性があると感じた。

国内研究調査報告

「新しい時代における寺院のあり方研究」における調査報告

新しい時代における寺院のあり方研究　研究員・講師　藤元 雅文

本研究は、人口減少や過疎化などにより、地域社会及び寺院の存続が危ぶまれている状況にあって、真宗学、歴史学、哲学・宗教学、地域社会学、社会福祉学、宗教人類学の知見を持ち寄り、地域社会と寺院の抱える問題点を調査し、特に地域における寺院の役割を研究することを目的としている。2017年度の上半期における２度の予備調査については既に報告済みである（『研究所報』No.71）が、そこで得た知見を踏まえ2017年度下半期の活動を展開していった。その柱は、本調査の対象地域を選定し、具体的に調査研究に着手することであった。そこで本報告では、本調査の対象地域選定について言及したのち、2017年度下半期において実施した調査報告の概要について、述べていくこととする。

本研究班が調査対象地域として選定したのは、岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区である。同地区は

①過疎化（少子高齢化）が著しく顕著な状況であるが
②今なお地域に密着した形で寺院の活動が、少なからず、なされており
③その活動は歴史的な経緯をも反映している

という、３つの要素を有する地域である。また、近郊の都市部である大垣市、岐阜市等からも自動車で１時間程という距離にあり、故郷を離れ近郊に移動した他出子や他出門信徒に関しても調査可能な地域である。かつ、すでに本学真宗総合研究所「指定研究」教如上人研究班において協力いただいた地域でもあり、研究員とも信頼関係が構築しやすく、本学から頻繁に調査することが可能な範囲の地域である。これらの点を踏まえると、研究班のテーマを調査するにあたって、非常に有意義な調査地域を選定することができたと考えている。

では、2017年度下半期において行った調査結果の概要について報告したい。

調査を実施した寺院、日程および場所は以下の通りである。また、特定研究班に所属する研究員または研究補助者が現地に赴き、面前での聞き取り調査という形で全て実施した。

【發心寺（揖斐川町春日美束）調査】
実施日：2017年12月14日　13：00～16：00
場　所　發心寺

【遍光寺（揖斐川町春日六合）調査】
実施日：2018年 2月21日　9：00～11：30
場　所　遍光寺

【光永寺（揖斐川町春日小宮神）調査】
実施日：2018年 2月21日　13：30～15：30
場　所　光永寺

【寂静寺（揖斐川町春日六合）調査】
実施日：2018年 2月26日　13：00～16：00
場　所　専稱寺（揖斐川町乙原）
※専稱寺住職は寂静寺代務者

【明隨寺（揖斐川町 春日香六）調査】
実施日：2018年2月28日　9：00～12：00
場　所　明隨寺

次に今回の調査結果の概要を述べていく。

（１）寺院の概要、運営、法務などに関して

本調査の対象地域である揖斐川町春日地区は、真宗史、殊に東本願寺教如上人と非常に深い縁のある地であり、浄土真宗の信仰が現在にまで伝承されている土地柄である。春日地区には９ヶ寺の真宗大谷派寺院があるが、2017年度に調査を行ったのは、上記５ヶ寺である。今回調査を行った５ヶ寺の現状は、人口減少による過疎・少子高齢化という共通の課題が存在する一方で、寺院や寺院に住む家族の状況、門信徒や地域住民と寺院との関わりの濃さや内容など異なった状況の中で寺院活動が行われており、同じ地区の中でも現状と課題が異なっている点が多々存在していることを改めて認識することとなった。

住職のあり方では、以前は兼業であったが現在は専業の住職、寺院以外の職業に就いていたが住職就任のために退職されて専業の方、従来から寺院専業の方とがあった。また、昭和50年代半ばから住職不在で、その集落に縁のある寺院の住職が代務者として寺院活動を守っているケースも一ヶ寺存在している。運営面では寺院収入だけで寺院運営および住職家族の生活

を維持することが困難である寺院が存在しており、以前就業していた際に貯めた預金や年金があることにより、住職家族の生活が維持できているケースもある。運営面を含め、現在はぎりぎり寺院を維持しているが、人口減少による門信徒の減少は避けることができないため、いつまで今のあり方を維持できるか、予断を許さない状況であり、次世代へ寺院をどのように継承していくかについても課題となっている。

一方、仏事、法要については、この地に伝統されてきた「春日五日講」をはじめ、報恩講、春・秋の彼岸会や永代経、盂蘭盆会など寺院の年中行事は以前より規模を小さくしたり、お斎（とき）の内容を変えたりなど、様々な工夫をしながらとはいえ、毎年大切に勤められている。墓地に関しては、寺院の敷地内に墓地を作る習慣がほとんど存在せず、個人の墓地や集落の墓地を有する集落と墓地そのものがほとんど存在しない集落とが存在している。現在は合葬墓（惣墓）を寺院の敷地内に作り、ご門徒の遺骨を納めることができるようにした寺院もある。

門信徒の葬儀については、以前と比べ、自宅や寺院以外の葬儀場を会場とすることが多くなっている。しかし家族葬や葬儀を行わないケースは限定的であり、葬儀参列への意識も以前と大きく変わっている状況ではないようである。回忌法要については、寺院や集落、家族の状況によってまちまちであるが、33回忌や50回忌まで勤めるご門徒も少なからず存在している一方、１周忌や３回忌まででご縁のなくなるケースも珍しくないようである。従来墓地そのものが寺院に存在せず、月忌参りもない地域であるために、寺院と門徒とのかかわる機会は、上記の法要および葬儀、回忌法要が中心となる。過疎化、高齢化がさらに進んでいけば、その先には葬儀や法要の数そのものが激減していくことはほぼ確実であり、地域と寺院のあり方がどこまで維持可能であるかは予断を許さない状況である。

とりわけ、ほとんどの寺院のご住職が共通に頭を悩ませていたのは、本堂などの施設を維持することの困難さである。上記の５ヶ寺はいずれも立派な本堂を有しているが、築年数の経過や自然災害等で修繕が必要となった時に、その費用をいかに捻出するかは切実な問題であると訴えられていた。

（２）門信徒数および集落の現状に関して

春日地区の門信徒の数に関しては、地域の人口減少に伴って大きく減少している。門徒数は従来と比べ、ほぼ半減したと答える寺院も少なくない。たとえば、以前３つあった小学校は一つに統合され、その小学校も全校で十数名という現状であり、中学校は既に廃校になっている。ある程度まとまって集落を形成している地区では新築する土地がなく、新しく家を建てられないので、若い人が根付きにくいということである。あるいは土地はあるが、冬の降雪が大変多い地区では高齢者となってから生活することには困難が伴い、故郷を思ってはいても、他出された住民が戻ってくることはほとんどないとのことである。雇用を生み出す産業も現在はなく、働いている世代は多くが春日を離れざるをえないので、世帯数の減少のみならず、独居暮らしや高齢者夫婦世帯の増加が目立っている。ただ、他地域から子育て世代が数世帯移住したというケースも見られる。春日地区の過疎化を解決するほどの規模ではないが、地域の行事に積極的に参加している親子もあると聞くので、春日地区の一つの好材料であるともいえよう。

（３）他出した門徒と寺院とのかかわりに関して

春日地区から他出された門徒とのつながりを切らさずに様々な工夫をしながら、故郷の寺院の護持にかかわる人を可能な限り減少させないように多くの寺院の住職方が活動している姿を見ることができた。たとえ

明隨寺調査風景

明隨寺

ば東本願寺が出している『同朋新聞』を毎月大垣や岐阜などの都市部に他出したご門徒の家に届けに行ったり、報恩講のたびに、法要で飾られたお華束（菓子）を同様に近隣に他出されたご家庭に届けに行くなど、地道な活動を続けているケースをお聞きした。また、炭焼きなどの技術をもった集落の人々が集団で移住された場所に数時間かけて法要に出向いていったり、他出された門徒のご家族にも寺院の門徒として様々な役割を依頼し日常的に他出した方であっても寺院との関わりを維持できるように組織作りに工夫している寺院もあった。また、他出された方に寺報や法要、年忌の案内を送るなど、可能なかぎり、他出門徒とのかかわりを大事にして寺院の維持に生かしていく事例を見出すことができた。さらに、ある寺院では門徒組織の中に他出門徒担当を決め、門徒間で問題解決の方法を探る工夫が見られた。

このように、これまで伝統されてきた寺院と地域の人々とのつながりを保ちながら、春日地区における寺院の維持を願って、様々な取り組みがなされており、殊に黙々と努力されている住職方の姿は強く印象に残った。

以上、2017年度下半期における調査に関する概要を報告した。今後は、春日地区にある残りの大谷派の寺院の調査を可能な範囲で行うとともに、上記の寺院調査において聞き取り調査にご協力いただける門信徒や地域住民の方をご紹介いただくことができているので、門信徒や地域住民の視線から、地域と寺院に関する現状と課題について調査を進めていく予定である。

高野山大学図書館所蔵の貴重資料の閲覧調査、および高野山の調査

東京分室PD研究員　藤原 智

2017年11月17日㈮から翌日にかけて、高野山大学図書館および高野山一帯の調査に赴いた。

高野山大学図書館には、金剛三昧院から寄託された『弁正論』の写本が所蔵されている。『弁正論』の日本への輸入経路はいくつか想定されるが、その一つが空海による請来である。しかし、この空海請来本は未発見である。金剛三昧院は、北条政子の発願により1211年に創建された。その金剛三昧院が蔵する『弁正論』は、もちろん近世に版本大蔵経から書写されたという可能性もあったが、その起源を中世にまで遡れる可能性も十分にあり、空海請来本を伝えていることも想定されうる。この写本の存在は『仏書解説大辞典』（1933-1935年）で石橋誠道が紹介し、また築島裕も「法隆寺本辨正論保安點」（1978年）「架藏辨正論卷第三保安點」（1991年）でそのことを指摘しているが未見だという。今回、高野山大学図書館の閲覧許可がいただけたため、それを調査した。その調査結果は、十分な検討を踏まえて別途発表したい。

翌日、古くから日本を代表する宗教地帯である高野山一帯を調査した。出張者の専門は親鸞の思想研究であり、その親鸞の生涯と高野山との間には特に接点は見られない。けれども、五来重は「高野山における親鸞聖人像」（大谷大学編『親鸞聖人』1961年）で、

> 高野山に親鸞聖人像が存在するということは……現代の概念からすれば、おそらく奇異の感がもたれるにちがいない。……しかし庶民の信仰にはどのような形で親鸞聖人の影像が意識されたかをかんがえる上ではむしろ興味ふかいのである。

と述べ、その結論として、

> このような御影の成立が単に偶然の思いつきでなく、宗教的偉人にたいする素樸な庶民の宗教感情の表出であることが理解されるであろう。そしてこのように荒唐無稽ともいわれるような画像にもわが民族の歴史と高野山の歴史という背景があり、その歴史的必然の所産であること

と指摘する。いうまでもなく、現在我々が知る親鸞は、歴史と無関係にあるのではない。親鸞の存在が様々に語られ、それが受容され、またあらたな親鸞が表出されていく。その繰り返しを通して、現代まで伝わっている。もちろんそこには親鸞自身の思想や史実と異なる点も数多くあるが、それも含めた総体が歴史的親鸞である。それを尋ねることは、親鸞のもつ宗教性を明らかにすることに繋がる。そしてまた五来が「高野山の歴史という背景」と言うように、高野山というのは日本における特殊な場である。その場において育まれた親鸞像は、やはりその場に行かねば実感することは

できないであろう。

苅萱堂、熊谷寺などに足を運びつつ、奥の院へ向かった。熊谷寺のお堂は、不動明王像と法然像が中央に置かれ、脇に親鸞・熊谷直実・覚信尼・蓮如の像が安置されている。寺の伝承として、親鸞の三回忌にあわせて覚信尼が親鸞の遺骨を納めたという。

奥の院への参道には、一の橋から続く参道からは外れたところであるが親鸞の墓もある。これは2015年9月の台風で損壊したが、2017年10月8日に再建されたばかりである。そのため屋根などが非常に新しく綺麗であった。

その後は、ちょうど熊谷寺の宝物二点が特別公開されていた霊宝館へ向かった。法然の髪を交えたとされる名号軸と、法然・親鸞・九条兼実・熊谷直実の四人で行われたとされる歌会の絵図である。この絵図はかなり大きいものであったが、四人が歌会をしているところへ、善導が現れつつ、さらに空海も現れたという絵である。高野山は江戸の初めころまで、時宗の流れを汲んだ念仏聖たちが多く活動していたことは五来重『高野聖』に詳しいが、これもそうした土壌からできたものであろう。高野山の信仰と法然・親鸞門流とを融合させようとした所産として非常に興味深いものであった。

奥の院、修復後の親鸞の墓

寺本家資料調査出張

西蔵文献研究　研究代表者・教授　三宅 伸一郎

1899年7月、能海寛とともに東チベットのリタンに足を踏み入れ、日本人初の入蔵者となった寺本婉雅（1872–1940）は、チベット大蔵経を日本に初めて将来し、後1915年には大谷大学教授に就任し、チベット語や仏教を教授した。彼が将来したチベット大蔵経のうち北京版は、本学に収蔵され、以降、関西における仏教研究の中心的な研究資源となった。本学のチベット研究の礎を築いた彼に関する資料としては、『蔵蒙旅日記』（横地祥原編、芙蓉書房、1974年）が唯一のものであったが、2006年、木場明志先生（当時本学教授）を中心とするグループによる城端別院での調査における「佛厳寺・寺本婉雅」との墨書のある「義和団兵服」の発見が、宗林寺及び村岡家における大量の資料の確認へとつながり、状況は変化した。西蔵文献研究班では、宗林寺及び村岡家の資料の重要性に鑑み、2007年度に資料を借用し、整理と調査を続け、2015年度には所蔵者のもとに返却した（『大谷大学真宗総合研究所研究所報』（68）、p.23参照）。

また、一連の調査の中で、寺本婉雅のご子孫宅に大量の資料が所蔵されていること、それらの多くが、高本康子嘱託研究員（当時、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）のもとに委託されていることがわかった。そこで、2015年9月に寺本家、10月には高本氏のもとを訪れ、この「寺本家資料」全体の概略を把握した（『大谷大学真宗総合研究所研究所報』（67）、p.34参照）。今回、この「寺本家資料」を、今後の寺本婉雅に対する研究の資料として活用できるよう写真撮影を行うこととし、2018年3月5日㈪から2018年3月7日㈬の日程で、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの高本氏のもとを再訪した。

今回の調査では時間の関係上、資料全ての写真撮影を行うことはできなかったが、彼のチベット研究の価値を検討する上で重要な研究ノートや原稿類を写真撮影することができた。

そのうち、『Note Book of Tibetanism』と題する3冊の研究ノート（その第1冊目にのみ1907年10月の日付が記載されている）は、クンブム寺滞在時に作成されたもので、チベットの宗教に関する用語とそれに対する解説を書き記したものである。用語の並び方に規則性が見られないところから、この研究ノートは、研究の中で新たな用語・未知の用語に出くわすごとに、その用語の意味を調べ書き付けていったものであると考えられる。なお、本研究ノートに見られるボン教関係の用語に関する記述の全ては、Sarat Chandra Das,

Tibetan-English Dictionary: with Sanskrit Synonyms. (Calcutta: The Bengal Secretariat Book Depot, 1902) に依拠している。

また、『西蔵志』と題する原稿は、ヨーロッパ人たちの研究成果も参考にした本格的なチベット概説書である。注目すべきは、ポン教に関し、かなりのページを割いて記述している点である。その中で彼は、「泰西人のポンポ教を称して、薩満教に類似すと言ふも□□の観□に依て□か云へるものなりと知るべし。然どもポンポ教本来の□□□□は決して薩満教に非ざることは前述せるが如し」（□は判読不明字）と、ポン教の起源をシャーマニズムに求めるヨーロッパ人研究者の見解を批判している。これは、ポン教研究史上先駆的な視点であると言えよう。また、「徳里格版にかかる大蔵経は支那紙を用ひナルタン版のとは解明にして廉価なり。蒙古人の購求するもの多くは同版典なり。年次徳里格人は犛牛に大蔵経を割載し、安土クンブンに来りて蒙古人の購求に応じ、亦其注文を受けて帰蕃するを例とす」といった、チベット滞在時の見聞も随所に見られ、興味深い。

また、小冊子『皇軍慰問生死一如の道』『黙働の光』（ともに 1937 年）など、寺本婉雅の編著作のうち本学図書館未所蔵資料の写真撮影も行った。最晩年の事績を知る上で重要な日記『黙働日誌』については、高本氏が作成された画像データを、氏のご好意により拝受することができた。

以上、今回の出張は、今後の寺本婉雅に対する研究を進める上で重要な資料を収集しえたという意味において、極めて有意義なものであった。

公開講演会・公開研究会

ジョン・ロブレグリオ氏による公開講演会の開催報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway

2017年12月11日㈪の16時半から、“Taishō-period Japanese Buddhist Reactions to Anglo-American Racism”（大正時代の日本仏教者の英米の人種差別に対する反応）という題のもとで、ジョン・ロブレグリオ氏（*The Eastern Buddhist* 誌編集者）による公開講演会を開催した。会場は本学の響流館３階にあるマルチメディア演習室で、本学の教員をはじめ、多くの来聴者が集った。

2017年４月をもって東方仏教徒協会の運用の実務が大谷大学の管理下に移管されることに伴い、1921年に鈴木大拙の主導で創刊された学術雑誌『*The Eastern Buddhist*』の発行は国際仏教研究の業務内容に加わった。そして８月に『*The Eastern Buddhist*』編集責任者としてロブレグリオ先生を迎えることができたが、今回の公開講演会は、本学の教員や学生にロブレグリオ氏の研究内容を知り、今後、良好な協力関係を築く最初の機会として設けられた。

ロブレグリオ先生は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の博士課程に在学していた頃、京都に移り住んで、京都大学を本拠に禅宗の近代化について研究を進めていた。やがてロンドンに行き、SOASで講師として勤めた後、イギリスのオックスフォード･ブルックス大学で、日本学と日本語を教授することになった。オックスフォード・ブルックス大学の授業では、日本学の幅広い内容を担当しなければならないため、日本の宗教、とりわけ仏教について教えることができるのは、僅か数年に一回ということを受けて、仏教関連の雑誌編集に携わることで、その研究関心に沿う仕事ができると考え、『*The Eastern Buddhist*』編集責任者の公募に対して応募した。

今回の講演では、ロブレグリオ先生が近年、取り組んでいる研究の一端について報告した。それは、昭和初期において日本の仏教界が軍国主義および国粋主義に加担していった背景を説明するもので、20年ほど前から、欧米の学界で日本の禅宗に対して展開されてきた批判に応答しようとしている。ロブレグリオ先生は、昭和初期の日本国内における国粋主義の流行を考える際、第一次世界大戦が終わった大正末期において欧米諸国が人種差別に基づく政策を多く推進し、西洋の民主主義に期待を寄せていた仏教界の多くの有識者を失望させたという点に留意する必要があると主張し、日本の仏教界の戦争協力が決して独断ではなく、西洋の諸国の差別的行為に反応するものであったということを指摘した。

以前の研究では、先生は『中外日報』等に発表された仏教者の論考を軸に、第一次世界大戦の終息に向けて行われていたパリ講和会議に対する期待を紹介した。多くの仏教者は、アメリカのウィルソン大統領が推進した国際連盟が制定される際に、連盟の規約においてすべての国の平等性を明記し、人種の理由で国家間の差別を認めないことを盛り込むよう、訴えかけていたが、講和会議でこの提案は採用されず、人種差別による国家の不平等が国際機構そのものに埋め込まれる結果となった。

今回の講演において、ロブレグリオ先生はその研究成果の一部を紹介した上で、同じ大正末期にアメリカで、日本からの移民を禁止する法案が成立したことに対する仏教界の反応を分析し、それにも仏教界が国際主義から日本国粋主義へと傾いていった一因があると論じた。日本からの移民を禁止する法律は1924年に制定されたが、それまで、約20万人の日本人がアメリカへと移り住んだ。人種が異なっているということで彼らは痛烈な差別の対象となり、アメリカの白人社会を守るために移民の禁止が必要だと多方面から主

講演の様子

張されていた。この動きに対して、日本の仏教界の著名人は批判的な姿勢を示し、それまで欧米の民衆主義を高く評価していた者もその限界を自覚し、独自に日本の将来を切り開かなければならないと考えるようになった。

講演の後の質疑応答に続けて、懇親会が慶聞館４階のマルチスペースで開かれ、ロブレグリオ先生と本学の教員が親睦を深めた。

ジェイミー・ハバード氏による公開講演会の開催報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway

2018 年 1 月 12 日㈮の 16 時半から、響流館３階のマルチメディア演習室にて、スミス大学のジェイミー・ハバード教授を招聘し、「Neurobiological Icchantika: At the End of the Day, We Are All Shinshū!」（「神経生物学的な一闡提（ニューロバイオロジカル　イッチャンティカ）：最後には、みんな真宗！）という題で講演をいただく形で、2017 年度の第二回の公開講演会を開催した。

ハバード教授は、ウィスコンシン大学マディソン校大学院で仏教学の学位を取得したが、在学中に本学名誉教授の安冨信哉先生・宮下晴輝先生がそちらで客員研究員として務めていたので、その時分から大谷大学と縁があり、その長いキャリアの中でたびたび本学の教員との交流を重ねてきた。その研究内容は多岐に亘っているが、中国の隋唐代に流行した三階教およびその開祖の信行の研究が著名な業績として取り上げることができる。氏は 2016 年 6 月から 2018 年 5 月末までの２年間、大谷大学の客員研究員 として京都に滞在していたので、今回の講演会に招くことができた。

講演の題材は、脳科学と仏教のことであった。近年の欧米の学界および宗教界では、この主題について種々の論考が発表され、研究者間のみならず、一般の人も強い関心を寄せている話題になっている。脳科学者が多く仏教の瞑想法についての実証的実験を行い、その効果について研究を進めている一方、ダライ・ラマを含む多くの仏教者はこのような研究成果に注目して、仏教の教えの妥当性と合理性を主張するようになっている。欧米の仏教界を率いる著名な僧侶が布教活動に際して脳科学の実験に言及し、その立場の左証としていることを受けて、仏教の教えが脳科学によって裏付けられているという認識がかなり広い範囲で持たれているようである。また、マインドフルネスの流行により、簡単な瞑想法を生活に取り入れることがストレスの軽減および生活の効率化につながると考えられており、幸福な生活を可能にするものとして仏教の瞑想の技術が欧米の社会の幅広い層から注目されている。

ジェイミー・ハバード先生

ハバード先生はそのような風潮に疑義を懐きながら、仏教教義と脳科学の共通項と相違点を整理して、その区別を明示する本の執筆に取り組んでいるが、今回の講演は、その本の一部となることを予定している。

講演の中では、ハバード先生は脳科学の研究の発達によって作り上げられてきた人間観が親鸞の提示した人間観と多くの共通項を持っていることを指摘した一方、仏教の教義における涅槃の位置付けはとうてい脳科学者の研究によって認められるものではないということを論じた。また、仏教が定義する「苦の解決」というものと、マインドフルネスに望まれている結果に大きな相違があるということを指摘し、近年の風潮に安易に乗るべきではないと主張した。

講演の題にある「神経生物学的な一闡提（ニューロバイオロジカル　イッチャンティカ）」は、脳科学の研究成果によって、人間が完全に「渇愛」や「妄念」を取り除くことが生物学的に不可能だということが立証されていることを示唆している。このような研究は、仏教の定義する「仏陀」になることの可能性を否定するものとして受け取ることもできるので、ハバード先生は仏教の教義内容の十分な吟味をせずに脳科学の実

験を仏教の妥当性の根拠として示すべきではないと忠告する一方、親鸞や釈尊の人間観に現れている大切なメッセージを見落としてはならないと論じた。特に先生は、近年のマインドフルネスブームで瞑想によって追求されている幸福と、釈尊が定義した幸福とが大きく異なっていることを重要視し、釈尊の教えによれば、個人的幸福は究極の目的ではなく、よく生きることの産物であったという点を忘れてはならないと結論付けた。

講演の終了後に、質疑応答の時間が設けられ、参加者から質問が出され、共通理解が深まった。

戦中期の真宗大谷派の海外布教に関する公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授　井黒 忍

東アジア班では、2017年11月24日㈮に中国における宗教と文化に関する研究活動の一環として、戦中期における大谷派の海外布教に関する公開研究会を開催した。報告者に坂井田夕起子氏（愛知大学国際問題研究所）を迎え、研究報告「真宗大谷派開教使神田恵雲とアモイ―雑誌『敬仏』『大乗』を素材として―」に基づき、今後の活用が望まれる関連史料や最新の研究成果などについて議論を深めた。

坂井田氏の報告においては、いまだ十分な利用がなされず、今後の活用の可能性が期待される多くの資料が紹介された。中でも、特筆すべきは中国各地に散らばる雑誌を網羅し、300種以上の雑誌新聞を復刻した『民国仏教期刊文献集成』（正編209冊（2006年：雑誌・書籍150種を復刻）、補編86冊（2008年：雑誌64種と正編の欠号）、三編35冊（2013年））の公刊である。そこには国内外においてすでに散逸した多くの雑誌や新聞が復刻されており、資料的価値は極めて高く、本学図書館にも本書の正編および補編が所蔵されており、今後のさらなる活用が望まれる。

また、報告中においては、日本の研究機関に所蔵されている日本人が民国期に中国で発行した仏教雑誌類の整理がなされ、本学には『内学』、『現代僧伽』、『日華仏教』、『仏学月刊』、『華北宗教年鑑』の五種が所蔵されているとの指摘がなされた。日本人が中国で発行した仏教雑誌の特徴として、日本語と中国語が併用される、日本の仏教学研究の成果を中国語で紹介する記事が中心となる、月刊誌として創刊し、1年程度で停刊されるという点が挙げられる。

日本人が中国で発行した仏教雑誌の代表的なものに『敬仏』と『大乗』があり、両誌の編集・発行に大きく関わった人物に真宗大谷派の神田恵雲がいる。神田は1924年に大谷大学専門部を卒業して中国福建省の厦門（アモイ）へわたり、1927年4月にはアモイ布教所で布教に従事する。さらに、アモイの名刹として知られる南普陀寺に設立された閩南仏学院で日本語教師を担当し、台湾の仏教雑誌『南瀛仏教』へ中国仏教事情を寄稿する。1934年には第二回汎太平洋仏教青年大会にアモイの居士を伴い参加し、1935年には日華仏教学会の設立に常務理事として参加する。同年、アモイで居士たちと共に厦門敬仏会を組織して、『敬仏』を発行する。その主編は福建アモイ敬仏会、発行は東本願寺教堂（神田恵雲）、言語は中国語で1935年から1936年にかけて出版された。その内容は、高僧伝、古今金言、招致福運的秘訣十条、国内・海外仏教事情、衛生常識、家庭常識などである。

また、日中戦争が勃発し、アモイが日本軍の占領下におかれると、神田は1937年にはアモイ本願寺主任、海軍通訳に任命される。1938年5月に日本海軍がアモイを占領した後、同年9月には日本海軍および台湾総督府が後援し、本願寺派も加わる大乗仏教青年会を設立（東本願寺教堂）。1939年6月に大乗仏教青年会の機関紙『大乗』を創刊する。その発行元は大乗仏教青年会（アモイ）、発行人は神田恵雲（興亜院アモイ連絡部）、言語は中国語で1939年から1943年頃にかけて刊行された。神田自身はその後、1939年7月に汕頭（スワトウ）皇軍従軍布教使、汕頭布教所開設係兼務となり、1941年7月に福州布教所開設を命じられ、同年9月に閩南仏学院が開校されると、教員の列に名を連ねている。

現代ベトナムにおける東洋研究･日本研究の現状と課題

ベトナム仏教研究　研究員・准教授　采睪 晃

ベトナム仏教研究班の研究課題の一つに、「ベトナムにおける「日本語研究教育を含む日本研究・東アジア研究・仏教研究」の現況を把握する」がある。その確認作業の一つとして、現在のベトナムにおける日本仏教研究の現状を把握するべく、ファム・ティ・トゥ・ザーン（Phạm Thị Thu Giang）氏（ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授）による「現代ベトナムにおける東洋研究・日本仏教研究の現状と課題」と題する公開講演会を、２月８日㈭午後４時30分から慶聞館K 404教室で開催した。

ザーン氏は、日本を含む東洋への関心が非常に高まっている状況を示された。東洋や日本への注目・研究が進んできてはいるものの、文献を読解するなどの基礎研究が圧倒的に不足している現状を提示して下さった。

ベトナムでは、ドイ・モイ政策以降に社会主義諸国以外との関係が深まったことに伴い、さまざまな国や地域の研究が進められるようになったという。

政府直轄の研究機関としてベトナム社会科学アカデミーが設置され、政府の政策策定協力に資することが目的とされている。そのため、研究者独自の視点による研究よりも政府の要求による研究が優先されている。同アカデミーの国際研究部内に東洋研究を行う部署も設置されている。10年ほど前にアジア日本研究センターが設置された。現在スタッフの数は44名を擁している。政策策定のための研究という性格上、応用的な研究が中心になり、基礎的な研究がおざなりになりがちであるとのことであった。

教育機関としては、全国で７箇所の大学が東洋学部を持っている。東洋学部は就職状況が良いこともあって、人気があり、優秀な学生が集まってきているという。教育内容は、社会主義教育を内容とする共通科目が多く、必ずしも専門科目を充実させることが出来ていないとのことであった。そういった専門科目の中でも、語学教育に重点が置かれている。ベトナム国家大学ホーチミン校では地域的な状況もあり、東洋学部から日本学科と韓国学科が独立して学部化されるようになった。教育機関の教員は担当授業科目が多く、なかなか研究に時間を割けない状況だが、独自に研究テーマを設定できることが強みである。

日本研究全体でも、日本研究よりも、日本語研究・日本語教育研究が中心になっている。しかし、語学以外の分野の重要性が徐々に認識されてきているという。それでも、辞書の編纂など基礎的な研究はまだ十分ではなく、応用的な研究が中心になっている。日本の宗教研究に至っては、語学的な障壁や当該分野に対する偏見もあって、ベトナム人による研究は一定の段階に留まってしまっていると評価された。日本の仏教に関しては鈴木大拙の影響が大きい。

また、質疑応答の中で、欧米の日本仏教研究の影響は必ずしも大きくないと指摘された。そもそも日本語を用いて論文を発表できるような研究者は、現状では必ずしも多くはないとのことであった。ベトナムはフランス統治下にあった時期があるが、フランス語による研究よりは英語の方が多いという。

講演会終了後、慶聞館４階のマルチスペース（南）において、加藤研究所長も交えての懇親会（情報交換会）を開催した。

学外からの参加者も多く、当初の予想を超えて30人を超える参加者を得た。日本国内における当該分野への関心が高いことを再認識させられた。

講演するザーン先生

懇親会（情報交換会）の様子

東京分室主催公開研究会「テーラワーダ仏教文献における善巧方便の諸相」開催報告

東京分室 PD 研究員　稲葉 維摩

2017 年 12 月 5 日㈫、真宗総合研究所東京分室にて第 4 回「宗教と人間」研究会を開催した。講師は河﨑豊氏（東京大学大学院人文社会系研究科助教）、題目は「テーラワーダ仏教文献における善巧方便の諸相」である。

河﨑氏は次のような問題点を指摘する。「善巧方便」とは重要な仏教用語の一つで、一般的な仏教辞典によれば「仏・菩薩が衆生教化のために設ける巧妙な手だて・手段のこと」（『岩波仏教辞典』第二版）と説明されている。このような説明は基本的に大乗仏教の「善巧方便」に対するものであり、研究も豊富だが、初期仏教あるいは部派仏教での「善巧方便」の研究は不十分である。この問題に対して河﨑氏は、パーリ語で仏典を伝える部派、テーラワーダの仏教文献を対象に「善巧方便」の用例を調査し、大乗仏教における「善巧方便」の出発点やテーラワーダ仏教での展開など、これまで明らかにされてこなかった重要な事柄を示した。以下に研究会の内容を具体的に報告する。

まず、パーリ語文献の歴史や構成を概観した。パーリ語文献は三蔵と呼ばれる仏教文献とそれらに対する種々の注釈書を唯一インドの言語で現代に伝えるもので、それはテーラワーダという部派によって編纂、伝承されてきた。パーリ語文献に描かれる仏教は、しばしば「初期仏教」、「原始仏教」などと呼ばれ、初期の仏教の姿を伝えると考えられてきたが、実際には一部派による伝承である。このことから、パーリ語文献の内容を無批判に「初期」とか「古い」とは言えないことなども指摘された。

次に、本題であるテーラワーダ仏教文献における「善巧方便」について検討した。まず、上記の三蔵の範囲で「善巧方便」を検討した。結論として、三蔵では、用例の少なさなどから、「善巧方便」は大乗仏教に見られるほど重要な意味を持っていたとは考えられないということが指摘された。一方で、後に「善巧方便」が展開していく出発点といえる重要な例も見つかった。そこでは必ず「善巧方便」が洞察力（般若）と一組になっている。洞察力で物事を見抜き、巧みな手段を用いるという内容である。また、大乗仏教の「善巧方便」は利他行なのだが、三蔵では自利利他いずれをも問わず、大乗仏教のような術語化も見られないことが示された。

次に、注釈文献における「善巧方便」の例を見た。テーラワーダ仏教の三蔵に対する主な注釈書はブッダゴーサとダンマパーラによる著作である。両者とも紀元後 5，6 世紀の人物である。その頃には大乗仏教も隆盛していたため、「善巧方便」がテーラワーダ仏教でどのように展開していったのか興味深い。まず、ブッダゴーサによる注釈書では、先の三蔵と同じく、「善巧方便」は重要な位置づけに置かれていなかった。ところが、ダンマパーラは「善巧方便」を教義の中に積極的に取り入れていた。ダンマパーラは大乗仏教の概念を多く取り入れることで知られている。「善巧方便」に関しても、三蔵やブッダゴーサと比べて、ダンマパーラには、大乗仏教に近しい大きな展開の見られることが指摘された。

最後に、テーラワーダ仏教の「善巧方便」の典型は「修行に困難を来した仏教僧に神通を行使して修行を進展させ、阿羅漢果に導く釈尊の教化」であることが示された。

発表の後には質疑応答が行われた。

なお、本発表の内容に関わる研究として、河﨑豊（2015）「南方上座部における善巧方便」『中央学術研究所紀要』44 : 149–164 が出版されている。

研究会の様子

真宗総合研究所彙報　2017. 10. 1 ～ 2018. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇ 2017 年 10 月 16 日㈪ 13:00 ～ 13:30（博綜館第 4 会議室）
（紀要編集委員会）
1．『真宗総合研究所研究紀要』第 35 号の編集について

◇ 2017 年 12 月 4 日㈪ 13:05 ～ 13:40（博綜館第 4 会議室）
（紀要編集委員会）
1．『真宗総合研究所研究紀要』第 35 号投稿論文の査読結果について
2．その他

◇ 2018 年 1 月 15 日㈪ 13:00 ～ 13:35（博綜館第 4 会議室）
1．2018 年度「一般研究」について
2．客員研究員の委嘱について

◇ 2018 年 3 月 19 日㈪ 10:40 ～ 11:15（博綜館第 3 会議室）
1．2018 年度「特定研究・指定研究」等の研究組織・研究計画について
2．その他

○ 2017 年度「特定・指定研究」「資料室」研究成果報告会
2018 年 3 月 8 日㈭ 17:00 ～ 17:50（慶聞館 4 階 K406 教室）

○ 2017 年度第 2 回研究員総会
2018 年 3 月 8 日㈭ 17:50 ～ 18:00（慶聞館 4 階 K406 教室）
1．真宗総合研究所長からの報告
懇親会　18:00 ～（慶聞館 4 階南マルチスペース）

◎研究ブランディング事業ワーキングチーム会議

◇ 2017 年 12 月 14 日（木）12:20 ～ 13:00（博綜館第 4 会議室）
1．採択結果の報告と今後の事業内容について

新しい時代における寺院のあり方研究

【揖斐川町　寺院・地域調査】
日　時：2017 年 12 月 14 日㈭
場　所：發心寺
内　容：岐阜県揖斐川町春日地区・發心寺に関する寺院および地域調査
参加者：山下憲昭

日　時：2018 年 2 月 21 日㈬
場　所：遍光寺・光永寺（揖斐川町春日地区）
内　容：岐阜県揖斐川町春日地区・遍光寺・光永寺に関する寺院および地域調査
参加者：東舘紹見　徳田剛　藤元雅文　磯部美紀

日　時　2018 年 2 月 26 日㈪
場　所：専稱寺（揖斐川町乙原）＊専稱寺住職は寂静寺代務者である。
内　容：岐阜県揖斐川町春日地区・寂静寺に関する寺院および地域調査
参加者：山下憲昭　藤枝真　磯部美紀

日　時：2018 年 2 月 28 日㈬
場　所：明隨寺
内　容：岐阜県揖斐川町春日地区・明隨寺に関する寺院および地域調査
参加者：木越康　本林靖久　磯部美紀

【学外打ち合わせ】
日　時：2017 年 10 月 5 日㈭
場　所：大垣教務所　会議室
内　容：本調査に向けた課題の確認、意見交換
参加者：木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛
藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

【学外研究機関との情報交換会】
日　時：2018 年 2 月 1 日㈭
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：地域における寺院の意義、課題などについての研究情報の交換、共有
出席者：斉藤仙邦　萩野寛雄　木村尚　（以上、東北福祉大学）
木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛
藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

【共同調査・現地報告会】
日　時：2018 年 3 月 13 日㈫
場　所：真宗大谷派能登教務所
内　容：2017 年 8 月 25 日～ 28 日に行われた能登地域寺院調査の現地報告会
参加者：徳田剛

【ミーティング】

◇第10回
日　時：2017年10月3日㈫14：40 － 16：10
場　所：響流館4階会議室
内　容：10月5日教務所打ち合わせについて
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第11回
日　時：2017年10月10日㈫14：40 － 16：10
場　所：真総研ミーティングルーム
内　容：10月5日教務所打ち合わせの確認など
今後の本調査について
学内アンケート調査について
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第12回
日　時：2017年10月24日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：学内アンケート調査項目について
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　磯部美紀

◇第13回
日　時：2017年11月7日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：学内アンケート調査用紙について
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第14回
日　時：2017年11月14日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：学内アンケート用紙、説明文検討
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　磯部美紀

◇第15回
日　時：2017年11月21日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：学内アンケート用紙、説明文等確定
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第16回
日　時：2017年12月5日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：倫理委員会の意見を受けての学内アンケート用紙、説明文等再検討
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第17回
日　時：2017年12月19日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：アンケート集計、揖斐川町寺院調査、今後の調査研究について
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第18回
日　時：2018年1月9日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：揖斐川町春日美束地区・地域調査報告など
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第19回
日　時：2018年1月23日㈫14：40 － 16：10
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：揖斐川町寺院調査の日程、調査内容についてなど
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第20回
日　時：2018年2月1日㈭16：00 － 17：00
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：揖斐川町寺院調査の日程、調査内容、アンケート確認
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第21回
日　時：2018年2月20日㈫10：30 － 12：00
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：揖斐川町寺院調査の日程、役割確認、調査内容、教職員向けアンケートについて
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀

◇第22回
日　時：2018年3月15日㈭10：30 － 12：30
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：揖斐川町寺院調査結果概要報告、3月13日能登調査現地報告会についてなど
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真
藤元雅文　松岡淳爾

国際仏教研究

＜英米班＞

【海外出張】

◇アメリカ宗教学会 2017 年度年次大会
2017 年 11 月 18 日㈯～ 21 日㈫（於　アメリカ合衆国ボストン市のハインズ会議場）
Michael J. Conway が参加

◇『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
2018 年 3 月 2 日㈮～ 4 日㈰（於　アメリカ合衆国バークレー市の浄土真宗センター）
井上尚実　Michael J. Conway　鶴留正智（修士課程第二学年）和田良世（修士課程第二学年）本多正弥（修士課程第一学年）

【会議】
◇ 2018 年度 ELTE 大学　学会パネル発表等打ち合わせ
2017 年 12 月 19 日㈫ 16:30 ～ 18:00
（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）
木越康　井上尚実　Robert F. Rhodes　Michael J. Conway　藤元雅文　上野牧生　梶哲也　常塚勇哲

◇国際研究班　研究計画確認
2018 年 2 月 9 日㈮ 11:00 ～ 11:40
（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）
井上尚実　Robert F. Rhodes　Michael J. Conway　常塚勇哲

【公開講演会】
① 2017 年 12 月 11 日㈪ 16:20 ～ 17:50
於　マルチメディア演習室（響流館 3 階）
講　師：John LoBreglio
講　題：Taishō-period Japanese Buddhist Reactions to Anglo-American Racism
「大正時代の日本仏教者の英米の人種差別に対する反応」
② 2018 年 1 月 12 日㈮ 16:20 ～ 17:50
於　マルチメディア演習室（響流館 3 階）
講　師：Jamie Hubbard
講　題：“Neurobiological Icchantika: At the End of the Day, We Are All Shinshū!”
「神経生物学的な一闡提（ニューロバイオロジカル　イッチャンティカ）：最後には、みんな真宗！」

また上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

＜東アジア班＞
東アジア班では、2017 年 11 月 24 日に中国における宗教と文化に関する研究活動の一環として、戦中期における大谷派の海外布教に関する公開研究会を開催した。報告者に坂井田夕起子氏（愛知大学国際問題研究所）を迎え、研究報告「真宗大谷派開教使神田恵雲とアモイ―雑誌『敬仏』『大乗』を素材として―」に基づき、今後の活用が望まれる関連史料や最新の研究成果などについて議論を深めた。

また、真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく共同研究のため、2018 年 3 月 3 日から 7 日までの間、松川節教授ならびに三鬼丈知任期制助教（当時）の 2 名を特別招聘者として中国社会科学院歴史研究所に派遣した。派遣期間中の 2018 年 3 月 6 日には、中国社会科学院歴史研究所において研究会が開催され、松川節教授が「最近モンゴル国発現の若干の碑刻・岩壁銘文について」、三鬼丈知助教が「中国医学における身体図像の展開について」と題する研究報告を行った。

西蔵文献研究
【海外出張】
◇ 3 月 26 日㈪～ 28 日㈬
場　所：中国・北京
目　的：中国蔵学研究中心訪問
出張者：三宅伸一郎・上野牧生（ともに研究員）

【国内出張】
◇ 3 月 5 日㈪～ 7 日㈬
場　所：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
目　的：寺本婉雅関連資料の閲覧と写真撮影
出張者：三宅伸一郎（研究員）

【嘱託研究員の招聘】
◇ 3 月 8 日㈭～ 9 日㈮
招聘者：高本康子
「寺本婉雅関連資料の研究」の総括と、寺本婉雅関連資料に対する今後の研究方針を協議するため。
9 日午前 10 時 30 分より、ミーティングルームにて、寺本婉雅関係や近代日本人とチベット仏教（ラマ教）との関わりなどについて研究会を開催

◇ 3 月 19 日㈪
招聘者：山口欧志
「モンゴル国立大学との共同研究」に関連し、今年度の研究調査報告を行ってもらうため。
当日午後 2 時より、ミーティングルームにて調査報告

【公開研究会】
◇11月29日㈬16:30～19:15
場　所：響流館3F　マルチメディア演習室
発表者・題目：三宅伸一郎
「19世紀後半のポン教高僧ツェウ法主の事跡について」
上野牧生
「『プトン佛教史』における「聴聞の利点」とその典拠」
清水洋平
「大谷大学が所蔵するタイ将来パーリ語貝葉写本について」
渡邊温子
「アメリカにおけるチベット仏教」
松川節
「モンゴル国立大学との「モンゴル仏教寺院」共同調査報告」

【研究員打ち合わせ】
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：研究班の運営・企画・諸問題に関する調整
開催日：10月12日㈭、2月20日㈫

ベトナム仏教研究
【打合せ】
10月18日㈬10:40～12:10

【『禅苑集英』読解研究会】
10月9日㈪、11月　6日㈪、11月20日㈪、
12月4日㈪、12月18日㈪、1月15日㈪、
1月29日㈪、2月20日㈫、3月26日㈪
いずれも13:00～14:30、真総研ミーティングルーム。

【公開講演会】
◇2月8日㈭16:30～
ファム・ティ・トゥ・ザーン（Phạm Thị Thu Giang）氏（ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授）を迎え、慶聞館4階K404教室において、「現代ベトナムにおける東洋研究・日本仏教研究の現状と課題」と題して公開講演会を開催した。
終了後、慶聞館4階マルチスペース（南）において、加藤研究所長を交えて懇親会（意見交換会）を開催した。30人以上の参加者があった。

【ベトナム調査】
期　間：2018年2月25日㈰～3月3日㈯
出　張：織田顕祐（研究代表者）、釆睪晃（研究員）
同　行：大西和彦（嘱託研究員）
フエを中心に現地調査を行った。フエでは、グエン・ヒュー・スー氏（宗教研究院研究員）とレー・トゥ・クォック氏（ベトナム文化芸術院フエ分院研究員）とが同道して情報提供を行ってくれた。フィールドワークを行った場所は、以下の通りである。
フエ王宮・天姥寺・宝林寺・慈曇寺・慈孝寺・禅林寺・報国寺・妙諦寺・国恩寺・禅尊寺・玉杯殿

大谷大学史資料室
【研究会参加】
◇全国大学史資料協議会　2017年度総会ならびに全国研究会
日　程：2017年10月11日㈬～13日㈮
場　所：愛知大学豊橋キャンパス
参加者：松岡智美・老泉量

◇全国大学史資料協議会西日本部会　2017年度第4回研究会
日　程：2017年12月5日㈫
場　所：京都府立京都学・歴彩館
参加者：松岡智美・老泉量

【ミーティング】
◇2018年1月30日㈫13：00～13：40
出席者：松浦典弘・松岡智美・老泉量
場　所：真宗総合研究所
内　容：図書館エントランス展示の内容確認及び、総務課所蔵資料の整理方法についての検討

◇2018年3月30日㈮15：00～15：30
出席者：松浦典弘・松岡智美・老泉量
場　所：真宗総合研究所
内　容：2017年度の成果報告と図書館エントランス展示の展示内容についての確認

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

デジタル・アーカイブ資料室（パーリ関係）
【海外出張】
◇3月14日㈬～3月22日㈭
場　所：タイ王国・バンコク
目　的：タイ国内パーリ語写本関係調査
出張者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

【国内出張】
◇2月19日(月)～2月20日(火)
場　所：浄土寺（神奈川県横須賀市）、智蔵寺（千葉県南房総市）
目　的：浄土寺、智蔵寺所蔵パーリ語貝葉写本調査
出張者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

【調　査】
◇1月22日(月)～1月23日(火)
場　所：大谷大学博物館
目　的：パーリ語貝葉文献と付属資料（包み布および挟み板）の調査
従事者：原田あゆみ（九州国立博物館）、佐藤留実（五島美術館）、清水洋平（嘱託研究員）、舟橋智哉（嘱託研究員）

◇1月24日(水)
場　所：大谷大学博物館
目　的：パーリ語貝葉写本デジタル写真撮影
従事者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

■東京分室

東京分室指定研究

【出張】
◇2018年2月28日(水)～3月16日(金)
出張先：ギリシャのアトス修道院およびベルギーのオルヴァル修道院
用　務：修道院における「祈りと労働」の実践調査
出張者：松澤裕樹・藤原智・稲葉維摩

【研究会】
◇2017年10月18日(水)
内　容：カレンのキリスト教信仰体系
発表者：田崎郁子
◇2017年10月25日(水)
内　容：グローバル社会における手段としての人文科学
発表者：松澤裕樹
◇2017年11月1日(水)
内　容：エックハルトの父－子関係理解と存在論
発表者：松澤裕樹
◇2017年11月8日(水)
内　容：パーリ語における -ya- 現在語幹の共時的な形式について
発表者：稲葉維摩
◇2017年11月15日(水)
内　容：清沢満之の議論を読む－仏教と進化論－
発表者：藤原智
◇2017年11月29日(水)
内　容：日本古写経『弁証論』巻第三の諸本比較
発表者：藤原智
◇2017年12月13日(水)
親鸞仏教センター主催　第58回「現代と親鸞の研究会」参加
テーマ：心の哲学と幸福学
講　師：前野隆司氏（慶應義塾大学大学院研究科教授）
◇2017年12月20日(水)
内　容：ギリシャのアトス修道院およびベルギーのオルヴァル修道院における「祈りと労働」の実践調査計画
◇2017年12月27日(水)
内　容：エックハルトの所有論
発表者：松澤裕樹
◇2018年1月17日(水)
内　容：「祈りと労働」実践調査最終打合せ、来年度計画
◇2018年1月31日(水)
内　容：仏教における非我と無所有について
発表者：稲葉維摩
◇2018年2月7日(水)
内　容：親鸞と聖冏の『弁正論』引用について
発表者：藤原智
◇2018年2月14日(水)
内　容：鈴木大拙の霊性概念におけるスウェーデンボルクの影響
発表者：松澤裕樹
◇2018年2月21日(水)
内　容：仏教サンスクリット語文献に見られる特徴
発表者：稲葉維摩

【公開研究会】
◇2017年12月5日(火)16時～（親鸞仏教センター5Fセミナー室）
第4回「宗教と人間」研究会
河崎豊氏（東京大学大学院人文社会系研究科　助教）
「テーラワーダ仏教文献における善巧方便の諸相」

個人研究田崎班

◇2017年10月2日(月)
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用　務：Open Forum with Pasuk Phongpaichit and Chris Baker への参加
出張者：田崎郁子

◇2017年10月20日㈮
出張先：京都大学
用　務：京都人類学研究会10月例会への参加
出張者：田崎郁子

◇2017年10月22日㈰
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用　務：第28回ゾミア研究会への参加
出張者：田崎郁子

◇2017年11月9日㈭～11月11日㈯
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用　務：第29回ゾミア研究会、第30回ゾミア研究会、東南アジア学会関西例会への参加
出張者：田崎郁子

◇2017年11月21日㈫
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用　務：第31回ゾミア研究会・KINDAS合同セミナーへの参加
出張者：田崎郁子

◇2018年3月1日㈭、3月2日㈮、3月7日㈬、3月9日㈮、3月14日㈬～3月16日㈮
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用　務：東南アジアのキリスト教受容等に関する文献の収集、調査
出張者：田崎郁子

◇2018年3月20日㈫
出張先：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室
用　務：杉山教授退官記念講演会出席
出張者：田崎郁子

◇2018年3月21日㈬、3月23日㈮
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用　務：Willem van Schendel氏（アムステルダム大学教授）研究会出席
出張者：田崎郁子

個人研究藤原班
【出張】
◇2018年1月31日㈬
出張先：築地本願寺
用　務：本願寺史料研究所公開講座参加
出張者：藤原智

個人研究松澤班
【出張】
◇2017年11月10日㈮～12日㈰
出張先：岡山大学津島キャンパス
用　務：中世哲学会第66回大会参加
出張者：松澤裕樹

◇2017年12月14日㈭～18日㈪
出張先：韓国外国語大学龍仁キャンパス
用　務：国際シンポジウム「CORE International Conference: Interactive Influence of East-West Thought as Mutual Exchange of East-West Culture」参加・発表
出張者：松澤裕樹

◇2018年3月15日㈭～19日㈪
出張先：①ルーヴァン・カトリック大学図書館（ベルギー・ルーヴァン）、②Amelie Thyssen Suditorium（ドイツ・ケルン）、③ヒルデガルト・フォン・ビンゲン修道院（ドイツ・リューデスハイム）
用　務：①文献調査、②マイスター・エックハルト学会年次大会参加、③修道院実地調査
出張者：松澤裕樹

■一般研究出張関係
一般研究大原班
◇2017年10月21日㈯～22日㈰
出張先：首都大学東京 南大沢キャンパス
用　務：「日本社会福祉学会第65回秋季大会」への参加及び発表
出張者：大原ゆい

◇2017年10月28日㈯～29日㈰
出張先：レクザムホール（香川県県民ホール）
用　務：「ケアメン四国in高松」への参加及び実践者へのヒアリング調査
出張者：大原ゆい

◇2017年11月5日㈰
出張先：北星学園大学
用　務：第47回全国社会福祉教育セミナー2017参加
出張者：大原ゆい

◇2018年1月21日㈰
出張先：東京家政学院大学千代田三番町キャンパス

用　務：「貧困・生活保護制度研究会」参加、報告
出張者：大原ゆい

◇2018年2月16日㈮
出張先：春日市社会福祉協議会
用　務：社会福祉専門職者へのヒアリング調査
出張者：大原ゆい

◇2018年2月20日㈫～21日㈬
出張先：神奈川県立保健福祉大学
用　務：「社会福祉学科研究会」への参加、発表
出張者：大原ゆい

◇2018年3月25日㈰
出張先：日本福祉教育専門学校
用　務：「日本社会福祉教育学会第8回春期研究集会」への参加
出張者：大原ゆい

※今号より、「科研費」採択の一般研究の出張については掲載いたしません。

■組織（2018年8月1日現在）

□研究所委員会
加藤 丈雄（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）
阿部 利洋（真宗総合研究所主事）
滝口 直子（大学院文学研究科長）
藤谷 徳孝（教育研究支援部事務部長）
野澤 弘篤（教育研究支援課長）
織田 顕祐（教授）
徳田　剛（准教授）
新田 智通（准教授）
藤原 正寿（准教授）
松浦 典弘（准教授）
脇坂 真弥（准教授）

□私立大学研究ブランディング事業ワーキングチーム
加藤 丈雄（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）
阿部 利洋（真宗総合研究所主事）
箕浦 暁雄（ベトナム仏教研究研究員）
井黒　忍（国際仏教研究研究員）
井上 尚実（国際仏教研究嘱託研究員）
新田 智通（国際仏教研究研究員）
松浦 典弘（前真宗総合研究所主事）
松川　節（国際仏教研究研究員、西蔵文献研究研究員）
Michael J. Conway（国際仏教研究研究員）
岡田 治之（企画・入試部事務部長）
藤谷 徳孝（教育研究支援部事務部長）

■人事

研究所主事　（新）阿部 利洋　（旧）松浦 典弘
（2018年4月1日付）

■客員研究員

□新規採用
＊妙　智（2018年4月1日付）
現　　職：中国山東省雲珠山菩提寺住職
研究期間：2018年9月1日～2019年8月31日

■特別研究員

□新規採用（2018年4月1日付）
＊岸野 亮示
現　　職：任期制助教
研究期間：2018年4月1日～2022年3月31日
研究課題：空海の遺志に立ち返る碩学たち：近世後期の「根本説一切有部律」研究

＊上田早記子
現　　職：本学非常勤講師
研究期間：2018年4月1日～2019年3月31日
研究課題：傷痍軍人職業保護事業で整形外科医が果たした役割についての歴史的研究

□解任（2018年3月31日付）
堀田 和義
宮崎 展昌

研　究　所　報　第72号
2018年8月1日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2018 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute